明治三十年九月二十四日發行

女鑑

第百四拾壹號

東京國光社

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

女鑑第百四拾一號 目錄

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

福依比賣



Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

讀書を擇ぶべし

人の心は、白紙の如し。白紙は、近く觸るゝ物の色に香に染み易く、その觸るゝ色や香の善惡美醜によりて、美はしき色の紙とも成り、汚き色の紙とも成り、めでたきかをりの紙ともなり、胸わるき臭みある紙とも成るものなり。人の心も、それに似たり。近く接する物の色香に染み易く、また、それによりて、めでたくゆかしき人とも成るべく、汚くあさましき人とも成るべきにこそ。

されば、人は、常に身を置くべき住所を擇ばざるかべらず。常に交る朋友をも擇ばざるべからず。されば、孟母三遷の敎へ、麻の中の蓬の撓めずして自ら直き譬へばかりをきゝても、いと明かなるべき事にして、唯、住所朋友を擇ぶべきのみにあらず、人は、常に見る物、聞くもの、接する物は、悉く擇ばざるべからず。

幼稚の時より、常に、よきをのみ擇びて、見もし、聞きもし、接するやうに、親も、我等も、注意せざるべからず。

讀書の如きも、殊に然り。よく、これを擇びて讀まざるべからず。書は、なほ、朋友の如し。共に交る朋友の品を見て、その人の品をも、大概は知るべきが如く、常に讀む書の品にて、また、その人の品をも、かつ〳〵は、知るべきものなり。書は、實に、人の上に、さばかりに深き關係を有てるものなれば、よく、よきもの、益あるものを擇び讀みて、害あるもの、益なきものは、目にはもとより、手をだに觸るべからず。

害ある書、益なき書とは、先づ第一に我が祖先の敎へに背き、我が尊王愛國の精神に戻り、我が親子の情誼をあやまり、我が夫婦の道に反き、我が長幼の序に戻り、我が朋友の義に違ひたる異敎の修身道德を說きたるものにして、こは最も恐るべき有害の書なり。元來修身道德の書を讀むは、これを知りて、誠に美はしき日本國民たる思想、品行、身體を具へむとするにあり。さるに、かゝる我が國體

に反きたる異教の修身、道德を知るも、其の美はしき日本國民たる思想、品行、身躰を具ふる能はざるのみならず、なかく〳〵に、我が一身をあやまり、一家をあやまり、はては、國家をあやまるものなれば、最も有害にして、最も恐るべきものなり。

次には、いやしき世上の人情を語れる小説なり。元來、吾人の情緖なるものは、極めて靈妙なるものなれど、また、極めて危險なるものなり。吾人は、これにより て、よく進み行くなれど、また、これによりて、世をあやまる事あり。なほ、汽車の蒸氣に於けるが如し。汽車は、蒸汽の力によりて、進みゆくものなれど、また、此の力によりて、自ら破壞する事ある如し。吾人の情緖は、これを高く美はしからしめば、天なる日月のにほふ如く、極めて高く美はしかるべきも、また、これをいやしく汚からしめば、塵埃の如く、泥土の如く、極めて汚くいやしかるべきものにして、されば、こそ、極めて危險なるものなれ。

されば、高く美はしき情をときて、これをよみて、吾人の情を高く美はしく導き

得るものならむには、小說とて、いとよく益あるものなるべけれど、徒らに下等動物と異らざる、汚きいやしき情をときたるものは、常にこれを讀まば、反て、わが心情をして、汚くいやしからしめんものにして、有害のものなり。よしや、我が心に、いやしく汚き念を起すばかりにあらずとも、常にさるものを見るも、決して、我が心情をして、高く美はしからしむるものにあらねば、何の益もあらざるものなり。意志の强からむ人、或は、既に高き見識を有ちたらむ人は、ともあれ、天性情に弱き女子、殊に、情を知り初めんほどの妙齡の女子には、かゝる小說書は、必ず害ありて益なきものなり。ゆめ讀むべからず。紛々たる今日の小說は、多く此の類なり。

吾人が最も恐るゝものは、此の二類なり。次よ、妙齡の女子のみに向て注意すべきは、先づ、日本の女子たる品格を具へむに必要なる書を、むねと第一に讀むべし。猥りに高尙めきたる理論の書を見るべからず。さる書見は第二の業なり。此の前後をあやまるが故に、世上には、往々、高尙めきたる理論のみをいひて、反

てなみ〳〵の國民たる品格を欠きたる女子あるなり。
すべて、女子よ、女子の書見は、女子の本分に、國民たる本分に、最も親切なる書をこそ擇びよむべけれ。塵はかりにても、女子の本分、國民の本分を害する如き書は見るべからず。汚き色は染み易く、悪しき臭氣は染み易きものなればこそ。



論説

成瀬仁藏君の女子教育問題を讀む

高角正人

教育が國家の基礎を培養する須要機關なることは、世人の普く知る所にして、女子なりとて、誰か其の教育を無用視するものあらん。然れども、我が國の女子に、比較的高尚なる教育を施すの不必要なることは、我が建國以來の國風國躰を熟知せるものゝ明に認識する處なり。元より、女子は、國家の慈母となりて、第二の國民を家庭に保育するの重任を負ひ、その子の賢才愚鈍も、多くその母の教養如何によりて分る。吾

人が女子教育を必要とするもの、多くは此の點に在りて存す。何ぞ、女子が社會に有するの地歩を進めて、國家の政に喙を容れ、男子と卓をたゝきて、國歩を是非するの女子を求むるの意ならんや。

吾人は、久しく、女子教育界に、成瀨仁藏君其の人あるを知る。君は、始め、新潟の耶蘇臭味の女學校にをり、後大阪の梅花女學校（耶蘇教徒の手に成れるもの）に行き、遂に米國に遊びて、歸りて日本女子大學の設立を企つ。余は君か此の擧あるを聞きて、先づ喜び、而して後憂ふ。余は嘗て、君が著したる女子教育といへる書を讀み、又大學設立の主意書を視る。二三新聞雜誌の贊成又反對論も之を聞けり。本誌上に掲載せし加茂之滿君の尙早論、齋木文夫君、又文明童子の反對論をも見る。猶、女子教育談、女子教育演説を讀みて、常に其の成り行きの如何を注視せり。頃日又教育公報に掲げたる女子教育問題といふを視るに、是、嘗て君が大阪に於て演説せし處にして、彼の女子教育演説に載せたる處なり。余は君が此の論を公報に寄せて、普く世の教育家に告ぐるに當りて、聊か此の論に就きて所感を述べ、世の識者に訴へて、其の是正を俟たんとす。

成瀨君は、我か教育を觀察するに、常に社會的の眼孔を以てし、一も國家といふ觀念

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

なきが如し。故に敎育を論ずるごとに、必、例を歐洲に引き、証を米國に取り、しかも、かつて我か國躰の已往將來に顧考する處なし。所謂彼を知りて己を知らざるものか。將た彼に心醉せるものか。是、君が大なる欠點にして、吾人か最も遺憾とする處なり。

余、君の此の論を讀一過するに、先づ、敎育の必要をいひ、亞ぎて輓近の進歩を解きて左の如くいへり。

敎育普及の程度と高等敎育を施す學校數との如きは、之を歐米文化の隆運と同一視すべきに非すと雖、兎に角、開國三十年間、敎育制度比年進歩の結果として、一般國民智識の程度著しく增進し、同時に無學者の數減少して、迷信漸く薄らぎ、惡風次第に改まり、從つて國民の品位徐々上進し來りしは、内外人の齊しく之を認識せざるを得ざるの事實とす云々。

此、君が社會的に敎育を觀察する一例にして、其の言はあながち當を得ざるにあらざれども、如何にも他邦人が我が敎育を評するが如き嫌なき能はす。苟も、我が國の女子敎育を以て自ら任ずるものが、此の如き精神を以て子女の養成に當れるは、前途甚だ氣遣はしきことなり。又曰く、

從來我邦に於て敎育とし曰はゞ、無意識的に、男子敎育のみを指すものなるかの如く思惟し、（中略）しかも亦女子敎育とは、半は一種の遊樂なるかの如く思惟せられ、其の多くは實用を期せず、富裕餘りある名門富家の女子が、慰み半分に學ぶが如き迹なきに非ず。云々、

此は當らぬことなり。勿論女子の敎育は、男子の如く意を注がれざりしと雖、決して無意識的といふべからず。元來我が國の女子は、智育よりも德育に重きをおくことなるが、此の德育は、學校に於いてするよりも、慈母の家庭に於いて養成さるゝ方遙に勝れるを以て、從來學校の必要を、さばかり感ぜず、母は膝下に淑德を養ひ才智を授けて、代々大和魂をいだける國民を敎養し來れり。然れども、時勢の進運に伴ひて、事業の繁多を來し、女子と雖、育兒にのみ專なる能はず、遂に女學校の必要を感ぜしものにして、女學校が設立されたるを見て、其の時に始めて女子敎育が行はれたる樣に思ふは大なる謬見なり。又、女子敎育は、一種の遊樂に思惟せられ、慰み半分に學びたりといへるは、彼の七八年前に於て、西洋其の儘の女子敎育制度を採用して、大に失敗したりし時にのみ當れる言にして、其の折こそ、一方の西洋心醉者の爲に過またれつれ、後漸く外風の我が國の女子に適應せざることを悟り、日を逐ふて改善に趣き、今

日にては稍觀るべきものあるに至りたるを知らずや。又曰く、
更に教育なき一般多數の婦女子の如きは、全く世運時潮の以外に別居して、國家の死生存亡に關する問題に對してさへ、冷々淡々、相關知せざるが如きものあるなり。事情斯の如くなるを以て、一般社會に於ける婦女子の地位、殆ど認識せられず（中略）女子の天才を發揮し、女子の本性を發揚し、女子の地位を上進せしむるは、實に我邦戰後の經營問題中最急要の問題なりといふも、誰か敢て之を拒まんや。と

此れ女子の天性を知らざるものと言はざるを得ず。君は、女子が國事を談ずるが如き風俗を慕ふとならん、こゝに論駁する價値なしと雖、我が國に於ける婦人の地位は、社會の表面に立ちて、男子と共に國家の安危を論ずべきものに非ず、婦人は能く内を守りて、賢良の子女を敎養し、良人に内顧の憂なからしむる、是、女子の天職にして、天賦の地位なり。女子の天才を發揮し、女子の本性を發揚するとも、亦是に過ぎざるのみ。聊、女子が内を治めて、男子は外にあたることは、我が國神代よりの制度にして、女子にして國事を執り、戰場に望むごときは、まれに變則の例として見るあるのみ。知らず戰後の經營は、何故に此の天賦の地位を變ずるの必要ありや。
進んで大學を設立する目的につきて曰く、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

吾人の今將に設立せんと欲する所の女學校は、之を稱して日本女子大學校といふと雖、其實、內部には幼稚園あり、小學校あり、高等女學校あり、大學本科あり、故に、目的も亦必ずしも唯大學敎育のみにあらざるや明白なり。云々、又大學といふ其の名は均しとするも、其の程度高低參差、必ずしも一定不動の者に非ざるなり、世には高度の大學もあれど、低度の大學もあるものなり、然り而して、吾人が女子大學校を設立するは、本邦現時の女子敎育程度を今一層高尙の度に進めんと欲するに在り。云々、

何ぞ其の言の曖昧なるや。大學といふ名を冠らせても、さまで高等の敎育を授くるに非ずとせば、何ぞ大學の名を用ゐるを要せん。是徒に其の言を大にするものにして、世人を惑はすに過ぎざるべし。寧ろ、程度の低しと思はるゝ今の高等女學校を今少し高度とし、尙足らざれば一年乃至二年を增加する方、年限よりいふも遙に優れる事なり。されば、大學々々と騷ぎ立てゝ東西に吹きたつるまでにも及ばざる事ならん。又一步を讓りて、假りに之を設立するとせんも、女子ば幼稚園よりはじめて、大學を卒業するまで、即高等女學校を卒業して尙三年の專門學科を修むることは、目今我國の風俗習慣よりしても、一般に施行し難く、例令一部の人にのみ之を能ふとするも、それは只女敎員な

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

どの專門家の外、一家の婦となり母となる女子には不必要たるを遁れず。次ぎて曰く、又其の程度の如きは、徒らに高淵を尊ぶに非ず。又卑近を好むに非ず。未だ曾て世界に比類なき、一種特別の吾邦婦人に必要適切なる程度の女子大學校を興さんことを期するに在り。

と、世界に比類なき一種特別とは如何なる程度を云へるものか、聞かまほしきことなり。吾人は例へ高尙に渉り卑近に陷らざる程度の教育なりとするも、社會主義を取り、外風に心醉せるものに、此の一種特別の教育を、我が同胞姉妹に施さるゝを、安心して受くる能はず、甚だ氣遣はしく、最も心配に思ふなり。又尙早論に答へて曰く、本邦女子の中等教育未だ普及せざる今日、一躍して女子大學を設立するは、階梯なき樓閣を建築すると何ぞ擇むんやと、是れ實に一應道理ある議論にして、等閑に付し去るべからざるものなりと雖、詮する所、寧ろ皮相の見たるを免かれざるなり。之を内外の教育史に徵するに、教育事業の普及發達の迹には、自ら低きより高きに進むと、高きより低きに及ぼすとの二途あるを認む、此の二途たるや、場合と時機とに臨み、前後緩急に應じて、偏重偏輕なく、適用採擇すべきものなりとす。若し夫れ中等教育か具備完成せざる以上は、斷じて女子大學を起すべからすと云ふが如く

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

んで、到底女子大學設立の曉を見るべからざるのみならず、眞個に女子教育の普及發達を妨害するの太しきものなりとす。

と、吾人は、未だ、何れの國にもあれ、何れの教育にもあれ、いにしへより、初めに高尙の學科を授けて、後に低度の科業を敎ゆるを聞かず、相當の學識なきものに、高尙の科學を授けんとするも、決して成し能はざることは見安すき道理に非ずや。彼の内外の教育史に徴するとは果して何事をか徴せし、高きより低きに及ぼすとは退歩をいへることとなるが。さなくぞ。或る一部の人士が、高等の學術を修め、夫より社會が漸く教育の必要を感じて、普通教育が一般に行はるゝに至りたるものをいへることとなるが、よもや斯の如き事を引きて、高きより低きに及ぼす教育ありなどゝは云はざるべしと信ず。されど、如何なることを引きて、此の尙早論の反駁に當てたるが、頗る了解に苦しむ所なり。又中等教育の普及したる後に、君が望む處の大學を立てよといふに、何の教育の發達を妨害することかある。寧ろ論者の言こそ首尾顚倒して、反りて發達を攪亂するものなれ。論者又いふ、

本邦の女子の中等教育は、其普及未だ完からずといへども、識者の眼中には、女子大學の必要既に判明なり。云々、

論者は、普通教育の未だ完全せざるを認めながら、譬へ低度とするにもせよ、今、大學校を設けんとするは、其の順序をあやまれることを自ら知れるなるべし。而して、論者のいふ識者とは如何なる識者ぞ、恐らくは、君等一派の識者にもあらんか。いふかしきことなり。

終りに論者は、地を大坂にトすることにつきて頗る辯護を勉めたれども、くだ〳〵しけれど一々こと擧げせず。大方は、色々に理屈を附會したるものと思はゞ可ならん。吾嘗て聞く、彼は久しく梅花女學校に在りて、大坂には大分地歩を占め、殊に此度設立せんとする大學の資金等を醵出せんとするものも、大坂地方に多けれど、爲に之を大阪に立つるものにして、彼の東京に遊說する如きは、只彼が賛成者に貴顯の名を多く募らんとする野心より出でたるなりと。此の言果して信なるや否やは知らざれども、今女子大學を設けんとせど、先づ東京より始むべきが至當の順序なることは、誰しも知れることにして、敢て贅言を弄するまでも無きことなり。此の一事を以ても、今論者が大學を設くるといふは、專ら國家の爲にのみするに非ざるを推知し得らるべし。吾人愛國の至誠遂に默して止む能はず、敢て江湖の識者に糺すこと爾。

女子教育一斑（四十九）

三輪田眞佐子

數學　女子普通教育に於いて課すべき數學は、生存上直接の家務に應ずると同時に、精神上間接の訓練に用ゆべきためなるべし。されど、先づ女子の家務は如何なるものなるかを考へて、數學の教程を定め、次に精神を訓練するため。數學の區域をも撰まざるべからず。

女子教育の要は、女子の天眞を害せずして發育せしむるのみならず、女子の短所をも補ふべきなり。故に、女子を教育せんとならば、女子の天性を熟知するため、女性的心理學ともいふべき透察力を有せでやはあるべき、皮相の觀察に委ねて女子を教育せんか、あはれ、おのつからなる女性を賊するものぞかし。

家政上必要なる數學は、四則、分數、比例、及び利息法の單純なるものに過ぎず。故に、教授につきて心得べきは、これ等の運算に熟達して、實用に堪へしむるこそ肝要なれ。又、わが國俗上、かの國の數學問題をそのまゝ授くるごときは、迂遠なるわざならむ。たとへば、わが國民は、日時の計算などは、專ら算露盤を用ゐるより、おのづから、分數よりも小數の思想に富むを以て、何分の何と言ふよりも、何割何分など言ふこそ、一般の習慣なれば、女子教育家は、これに類する問題の撰擇をも注意すべ

きなり。
實際女子執務につきての數學は、簡易なるものに過ぎざれども、なほ、精神を訓練するため、平面幾何學大意、及び代數の一次方程式まで授業すべし。但、かくては尋常中學校の程度と大差なき疑あれども、女子に適當するやう鹽梅するは、敎師の責任なり。

おのれ、いつも、女子の天性を研究するに、なべて女子は、何事につきても感情に訴ふため、事を過大、あるは過小に思ひ易く、單に物の小局部にのみ綿密なるも、大體を慮らざる傾きあり。由りて、これらの短所を補ふには、數學を授けて、慮を周到ならしむるに若かず。

元來、おのれは、當時の敎育を受けざりしを以て、數學の道には暗きことながら、完全なる女子敎育を施すには、大概なりとも、數學は如何なるものなるかを知るべき必要あるを以て、近來僅に試みしが、確にこの學は、分類、總合、比較、あるは因果などの觀念を養ひ得るに足るものなれど、天性これらの觀念に乏しき女子に採りては、他の學科よりも、比較上高尙なる數學を科するこそ、心育に効あれと思ふなり。

要するに、家政に必要なる數學は、熟達を旨とし、他は敢て難問を要せず。精神を訓

練するためにせよかし。

作文　文字もて思想を顯すものを文章となんいふ。されば、文章の主要は思想なれど、これを正しうかくにあらざれば、そが意味を充分に通ずること能はざるべし。故に、作文は、文典も注意すべきなり。さりとて、語句を修飾せざれば、以て人を感動するに足らじ、故に、美辭學をも心得ざるべからず。

さりながら、女子普通教育に於ては、女生が、他日人の妻となり母となりて執るべき任務上肝要なる作文を專ら練習すべし。これと同時に、文學は文明の花とぞいふ説あるごとく、世の開け行くにつれて盛なるべきを以て、作文のまに〳〵文學の趣味をも授くべし。されば、獨り世の風潮に遲れざるのみならず、一切の女德も、文學の影響を享けて、ひとしほ潤澤ならむか。

わが國の女子は、歷史上既に和歌と離れがたきものなれば、中流以上の女子は、交際上、敷島の道を知らざるべからず。蓋、日用の消息だに、折にふれての和歌一首添へんには、山鳥の尾のなが〳〵しき花も實もなき言の葉を重ねんよりも、深く人の感情をひくならんかし。されば、是非、女子には、作文と共に作歌をも敎ふべし。おのれは、嘗て女生に作歌を試みしに、作文その他の學科を防げざるを經驗せり。故に、こ

を女の學則に加へんも可ならんか。

文体を大別すれば、三種とならむ。曰く書翰体、曰く普通体、曰く擬古体なり。さて擬古体とは、源語など、總て古き時代の文章に擬ふものをいふ。勿論こは日本の古文として、若くは美文として、文學上にこの体を復活せしむるは、人々の隨意なれども、古文には死語に屬するも多ければ、全然この体にまねぶは迂きわざにこそ。料古文中よりは、高雅優美にして、然も活用するに足る粹を撰びて、作文の材料に供することそ教育家の務なれ。

普通体とは、現今國民間に活用せらるゝところの文体をいふものなれば、最も肝要なり。されど、如何せん、維新以來、やゝ文脈亂れ、あるは漢文かき流し体とか、あるは洋文飜譯体ともいふべき新体行はれて、擬古体と同じく、そのまゝにては標準とするに足らざれば、先づ德川時代の和漢學を兼ねし、新井白石翁、又、本居宣長大人など諸大家の文脉に、明治時代の學術語、あるは實用語を交へしものを以て、普通体の摸範になすこそ良けれ。例へば、鐵道なる言語を、黒がねの道と改むる類は、擬古体、若くは和歌の科としては止むを得ざらむも、普通にはあらざるべし。さりとて、語格の亂るゝ新文体も亦普通と言ふべからず。然し、今日女子の文章は、擬古体に流れて、男

子の文章は新体に失へど、折衷してこそ普通と言ふべけれ。されど、和文に迂き良人は、妻君の記事を見て解し得ず、とある人のもの語りぬも理にこそ。但、地方女學校の生徒は、なべて國文の力に乏しけれどにや、反りて新躰に傾く恐れあり。あはれ、過ぎたるは及ばざるに若かず。

書翰體は、候文體にして、日時の消息に用ゐる文體なれど、意義を明了にかくこそ肝要なれ。世にこれを俗用體といふも、止むを得ざる外は、正しき言の葉を用ゆべし。わきて注意すべきは、四季の文句のみを列ねて、用語を端末にかき。あるは他の宿所姓名などを報知するに、卿書、若くは畧字をもて迷を起し。あるは御氣の毒様など敬語を亂用し。あるは過去未來の時を區別せざるなど、枚擧に堪へざるばかりなり。

以上は、男女ともに心すべきふしなれども、殊に女子には、女文体ともいふべき、おのづからなる差別あるべし。されど、學術、及び實用上、男女文体に區別する能はざる場合あり。故に、女子とて、強て文躰を異にする必要はあらじ。唯、女子の天性に委ねて、その文章自然に婉娩なるべし。決して、女文体は人爲の差別にあらず、全く天賦の相違なるぞかし。故に、女子は、期せずして女子らしき文体を作るに至らむ。單に女文は、假名を用ゐ、古文に擬ふため女子らしきにあらず。たとひ、洋文をしてもの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

せんとも、心ばせの細かなる、情の淺からざること、男文と相異なるべし。おのれ、女生に作文を敎ふるとき、唯親切につゝしみて書くべしといへど、わざとならざる女文体に適ふをためしけり。若し形式のみを戒めんか、擬古に流れ、普通敎育の目的を達せざるべし。

思ふに、女子敎育の要は、心育にしあれど、文章は心をかくべしと敎ふべし。女德正しからざる女子も、字句のみは流麗に飾り得ん。これ、文章家と敎育家の見識を區別するに足るべし。



史談

山田りと女の逸傳

井上頼文

世に大なる功を立てしも、其の名の傳はらぬものあり。世に大なる業を興しゝも、知らるゝこと稀なるものあり。山田りと女のごときも即これなり。りと女は伊勢國度會

郡古市町の人、屋號を千束屋と稱べり。

ひとゝなりつゝまやかにして、無益の費を省き、ひたぶるに心を貯蓄のみちに注ぎたりき。その一端をいはゞ、新に箒を買ふときは、柄五寸を切り捨るを常としき。柄長ければ疊にさはること強し、強ければ箒を傷め、また疊をもそこなふ恐れあればなりといへり。又火吹竹を用ゐるには。必ず先端に近く横に一つの穴を穿てりき。火を吹き起すときは、横の穴を指もて塞がざれば風いでず。指もて塞ぐ故に、火に近づけば手熱し、熱き故に火に接近することを得ず。これ、火吹竹の火に燒けざるが爲なりといへりき。

かゝることはいさゝかなるわざながら、此の一事もて、よろづ心を經濟に用ひたりしことは知らるべし。りと女、をさなかりし時、ふた親の常に教へけるは、いやしくも、天の下に人と生れ出でたらんには、必、世の中に一つの益を興さでは人と生れいでたる甲斐あるべからず。益を興さんとならば、こがねなくては整ひがたけん。そのこがねを蓄へんとならば、常につゝまやかにせずば貯へがたかるべし。如何に益を起し人を救はんとはりするとも、黄金なくばかなひがたからん。その心して、いまよりよくつとめよと教へたりき。りと女、をさな心にも、此の訓誡を深く感じて忘るゝことな

く、常に意を家道に注ぎしかど、つひに富有の身とはなりぬとぞ。
世に親のいさめを忘れずして、つゝまやかに家を治め財を集むる人はあらん。されど、有用に散ずべき道を知りてその財を散ずる人は、丈夫と雖もまれなるべし。まして女の身として、資財をつくし、大なる工事を起し、萬世の公益を計りたる勇氣のほどこそをゝしけれ。いでや、その功業の大樣を記してん。
そのかみ、古市より宇治にいたる道に山あり、間の山といふ。此の地はいとけはしく、巖かどこゝしく、木の根わだかまり、おどろ生ひ繁りて、晝もまた暗かりき。されど、諸國より内宮にまうづる者、高きも卑きも、この坂路を越ゆる時は、冬も、熱湯の如き汗に衣をうるほしき。況して、土さくるみな月、梢の蟬の聲しきる頃は、くるしさ譬へんかたなかりき。りと女、このありさまを見て思へらく、我が身は、かしこかれど大御神の宮居まぢかく生れ、朝夕に、廣き厚き御惠をかゝふれり。家のなりゆたかに安らけきも、みな其の御かげによりてなりけり。いかで諸人の越えがてにする、間の山の坂路きりひらきて、其のなやみを除き大御神の宮居にまうづる人の、たよりをはからでやはあるべきと、すなはちあまたの人夫をやとひて、いはほを崩し、木の根を穿ち、おどろを芟りそけてたひらかなる道となしつ。この業によりてつひやせ

るいりめ、凡一千五百圓にあまれりきとなん。この事、徳川幕府に聞えしかぜ、その功をほめて、名字帶刀を許さるる家柄とはなされぬ。此の頃、民間にて名字帶刀を許さるゝは、今、金鵄勳章たまはりし如く、いと面目の事なりき。あはれ、かよわき女の身にて、かゝる大事業を起し、諸人の困苦を除きたるは、實に烈女といひつべし。父母の遺命を全くし、祖先の名を顯はし、大なる榮譽を得たるは、實に孝婦とたゝへつべし。しかるを、世人は、鶴梁文鈔、または譚故書餘等によりて、此の業は、皆月仙法師の功なりと思へるぞ多かる。かくしつゝ數百年を經ぜ、りと女の名は遂に知る人なきに至るべし。因りて、聊その功業を記し、あはせて、間の山の工事の、月仙法師にればはれたる所由を辨ふべし。そは、林長孺翁の鶴梁文鈔卷の四なる月仙の記事に、「僧月仙、伊勢人善二繪事一、然甚貪二潤筆之資一、毎レ有二請レ畫者一、必先論レ價、而後搦レ筆、因レ是謗議囂然、月仙弗レ顧也、(中畧)後益貴二其價一、稱二貸其所一レ獲金、竟至二巨萬一、乃稍稍散レ之、以自濟者甚多至レ今伊勢人呼曰二月仙金一云、」とある「附記に、齋藤拙堂曰、宮川渡船本收レ錢、間之山路本甚惡、月仙捐二私千金一、並除二旅人之患一、其功於山田大矣、足代寛居爲レ余言如レ此。と見え、又芳野金陵翁の譚故書餘乾の卷なる月仙小傳に、「幼而剃度、性好レ畫、居常師レ心、(中略)畫禪一如、我將下以二買物一爲レ師以暢中吾指神上於是、

倅厲覃思、熟而變、變而化、奇氣横發、欲二化而飛一、果得レ爲二一開山作物一、名噪二海內一、遂以致二巨富一云、一夕行脚僧大雅來宿、曰、水雲爲レ心、樹石爲レ棲、豈非二鼻祖之敎一乎、假令不レ能レ出レ寺入レ山、而書畫繳レ利以致レ富、何嗜二銅臭一之甚也、是豈特師一人汚辱、請改レ稱、師曰誠然、抑予之於レ畫、固可レ已而不レ已者、蓋有レ以也、予孤貧、戚族拉而投二予茲寺一、師憫レ之卵而翼、師而兼二父母之恩一焉、臨レ寂、命以爲二寺主一、所以不レ能二水雲爲レ心樹石爲一レ棲也、徃年凶荒、茲土特甚、餓殍相枕道饉相望、因意書畫玩物也、而愛レ之必非二貧者一、自レ今以徃忍辱揮灑、蓄二其潤筆一積以二歳月一、庶幾足二以少賙一凍餓上乎、幸而請者陸續及レ門、託二之人一、積而得二五百金一、乃屬二山田奉行一、以充二數村之凶荒一焉、則宜已矣、然又謂逢山險、隘來拜二大廟一者、病レ之、先師恒以爲レ憂、乃爲揮灑、得二三百餘金一、因興レ功、險以夷、隘以豁、行旅喜騰謳歌而過、則將レ燒二筆硯一矣」云々と記せり。當時文豪と稱揚せられたる此の兩儒の文を讀む人、たゞに文華のうるはしきをめではやして、事實の本末を探らず、全く此の二書に依りて、相の山の阪路は、月仙法師の發意によりて、始めて開かれたりと思へりき。故に、りと女の功業を知る人あらずなりぬ。まして耳食のともがらは、兩儒の文を確なるよりどころとして、此の功業を諸書に記し傳へしかた、いよいよ月仙法師の功は顯れて、りと女のことは隱れはてぬ。（つゞく）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

福依比賣

鹽井ふく子

禍福門なし、たゞその招ぐ處によりて來るのみ。仁壽のむかし、薩摩の國に、あやしき農夫の女に福依比賣と云ふありけり。父なる人は、久しくわづらひて、世のたづきも知らに、病床にうち臥せど、母なる人も年老いて、また萬事うちすぐれざるに、杖柱とたのまんずるますら男の子もなくて、たゞ此の福依比賣一人のみなりけるに、もとより、かつ〴〵世をすぐせし家の、朝夕のけぶりも、いとゞ心細く見ゑけるぞあはれなる。

福依比賣、年まだ二八、露霜いとふべき花の盛りの色をも香をも、つゆむかり惜しみも省もせず、雨にたゝかれ、日にやかれて、日毎に、人のために田をかへし、畠を作り、あたらみどりの髮、風にくしけづるより外は、たゑてかきも上げず。朝にとく山に柴をとり、夕にれそく人の家に薪をくだき、僅の賃銀を得て父母を養ひ、歸りてはくりやの事をさへ身一つにあつかひ、なほ、いぬるまをいねずして、父の腰をさすり、母のかたを撫で、己れが骨身のくだくるは、つゆ思はず。たゞ父母の手足の痛みのくるしからんをなげき、己が年の盛りの、空しく過ぎゆくなどは、つゆ恨みず。たゞ父母が年浪のよるをのみ悲しみ、ある限りの勞働、苦勞、火の如くやけたる土に足をむ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し、もゆるばかりなる光に、背を灼くを慣らはしとする百姓ばらの目にさへあまりて、感じ感せぬものはなかりけりとなり。

殊に、福依比賣、たゞよく父母を養ふのみにはあらず、また、よく、敬ひかしづき、尊みつかへ、藥餌は必ずなめてすゝめ、膳羞には、必ず甘馨を調じてまゐらする心がけのさま中々に、ま草かる鄙の荒野には、世にめづらしき限りにて、誠に白金にも、黄金にも、玉にもまさりたる寶なりけり。

福依比賣、さばかり赤心をつくして介抱したれど、果敢なかりけり人生、父なる人は、病床にある事廿年、遂に空しきからと成りにたるに、孝女は自らの玉の緒も絶ぬんばかりに呼びさけびて、屍を離れず抱き臥して泣きと泣きたりしを、やう〳〵に人々になぐさめられて、前後もしらず野邊のおくりすましゝ後も、久しうたゞ反哺の心をつくさゞりしを恨みては、袂をしぼりけるを、見る人、聞く人、またその孝女が情のつゆに、袖をしぼらぬはなかりしとなり。かゝるめでたき孝心は、いつかは天上に聞えて、いたく感せさせられ、位三級を賜はり、その門閭をあらはされけるとなり。めでたしともめでたき福依比賣の行跡、傳へしるゝまゝに、いとゞ我が身のはづかしうおぼゆる事のみにて、筆にもすゝまざるぞ我れながらあさましき。



家政

茶の湯

薄茶平手前（前號の續）

孤峰庵不美
關　葦雄

其の次、右手にて、柄杓を柄の先切留の所を持來り、左手を出し、中節の際を持、左の膝頭に搆へ（但しかまへたる手品は始め置付る時の如し）其の次、右手にて、釜の蓋を摘みて持（但し此つまみ方拇指と名刺指とにて向前にし中指は名刺指の股に添へ殘る貳本は中指になそらへて添置へし）上け、釜の口を向より明け、前へ引、釜の口の前にて蓋を向へ傾け、蓋の裏に付き有る湯氣の露を切落すべし。再ひ蓋を平等にして前へ持來り、蓋置へ載置べし。其の次、右手にて茶碗の中の茶巾を取、（但し茶巾は上の折目の多き方を持）釜の蓋の上へ、手の往形に摘へ掛て置べし。其の次、右の手にし柄杓の元を持、前の方へ持來り、柄杓を平等に成樣になして、左手の指を節の向へ送り、（但し一寸先を持）前の方先と中節との眞中を、右の手にて持。（但し拇指と名刺指の股の間に差挾み都ての指を伸し先の方は名刺指と中指の間に載持を習とす向口傳）其の次、釜の湯を汲、茶碗へ入べし、（但し湯を汲むに習あり柄杓の合を左の方より右の方へ圓く廻しながら合の中に湯の入樣にすへし湯は釜の底を汲を習とす向口傳）此の湯は澤山に汲むを良とす。柄杓の合を平等にし、釜の口の上へ持行、釜の向の縁へ合の底を掛、柄は前の縁へかくる、持たる手は、拇指と名刺指との間の股に鋏み、惣の指を伸し。爪先上へ向け、手首を折て此の品をすべし。是を切柄杓と云。其の次、右手にて茶筌を持、割稽古

に示したるごとく、茶筌湯治をして、後茶碗を右手にて取、左手へ移し、篤と持、但し茶碗の縁へ拇指を掛名刺指以下四本は茶碗の香臺へ一杯に掛へし 茶碗を傾け、湯を翻へ翻すべし。直に茶碗を起し、右手にて、釜の蓋の上に置たる茶巾を取、一旦茶碗の中へ入置、前の方上の折目を右手にて持引立、右手の拇指の爪外向へなる様に捻り廻し、茶巾二ツ、折目の方茶碗の外の方へ成様に縁へ掛け、右手、拇指、名刺指の股にて狭み、茶碗を前へ向、數三つにふき廻すべし。ふき留り股に狭みたる儘拔取、茶碗の中へ、右手の拇指下に成様に、爪先を向へして入、右手を持替て、茶巾へ竪に中程を持 但茶巾島田まげになる様にすへし 茶碗の中を、假名のゆの字に、左、右、中、と三つに拭ふべし。直に茶巾を茶碗の中へ入べし、但手の形に入る手形とは竪にも非す横にも非す其間なるを云所謂筋違なり 右手にて茶碗を持下に置、直に右手にて茶巾を持、釜の蓋の上へ載置、次に右手にて茶杓を持、但し茶杓を持に口傳有拇指と名刺指との腹にて持中指の腹へ半分掛るを習とす 膝の上に搆へ、左手にて棗を持、前の中央に持來り、右手の茶杓を繰込、但しくりこむとは茶杓を深く持を云 紅指と小指にて持、手をうつむけ、拇指名刺中指三本にて棗の蓋を取、但し棗の蓋は前の方を先に上け向の方印籠口に離れ取きせる時向を先に前の方跡にて締る様に心へし 茶碗の右の脇に並べ置、茶杓を繰出し、三本の指にて持、但し棗を持様に拇名中の三本の指の腹にて持尚口傳有へし 棗を茶碗の左の方へ持行、縁より僅少上げて茶碗の方へ傾くべし。棗の中の茶を、茶杓の貝先にて抄ひ、二たび茶碗へ入べし。但し始は一杯に掛次は多少を加減すへし 直に茶碗の貝先裏の方曲り目の先にて、茶を解き、分量宜敷けれど左手に持たる棗を膝の上に戻し、右手の茶杓を、茶碗の縁右の方にて輕く一つ打、茶の付たるを拂ひ落すへし、但し茶杓の中節と具先曲目との半にて打茶杓に非す裏に非す横腹にてすべし 直く茶杓を繰込、棗の蓋をして、又茶杓を繰出し、如始膝に搆、棗を元の處へ

置付べし。茶杓を其の上へ掛置但し茶杓を盌に掛時は向その方より掛る心持有へし其の次右手にて水指の蓋を取但し水指の蓋ははじきを持へし膝の前に持來り、左手にて前の方を拇指を上にして持、蓋を右の方へ起し、はじきの左の方を右手にて持、但し拇指蓋の裏の方になる様に持はじきを眞横にして、水指の勝手付へ立掛べし。但しはじきの頭水指へ當る様に

（以下次號）

正誤

女鑑第百三拾七號、割稽古の部、三拾九頁十二行目、茶巾を燃所の纜中程迄まき下けはこき下けの誤。同百三拾八號、二十一頁の三行目、茶筌を放し輕く音有樣にするの下に左手を出し茶碗の左の方を持少し右の方へ傾けの二十一字を脫す同百四十號、二十五頁上の段二行目、割書に三つ鐵輪に置へしのへの字を脫す。同四行目、水翻の持方割書中に、左右の脇とある右の字は誤。同十行目、柄の元とあるとの字はにの字の誤。同二十六頁目、上の段四行目、茶杓を取掛事の掛は拭の誤。

女の禮（二）

有住常子

これもをみなへし物語の如、禮まなぶもゝのまづ心得侍るべき事をかきつけにたる草紙になむと、をしへ子たちの讀かはせるを、取て見侍るに、げにもさ侍る、女訓書のかしらともあふぐべき、乳母の艸紙になむありける。今女の禮の事を、たゞしうものせんとおもひ侍りたるをりから、いとをかしきに、此草紙いまだ開きたまはぬきみたちに、みつよつむかり、むねと心かくべきこと草をぬきとりて、わくりて、見せまゐらするになん。

こはぬやのをしへごとにもあらぬ、ふるごとよとな思したとしたまひそ。この草紙は、こよなき女の訓書に侍るものを。

目は、人の顔のうちのいきものにて、大なるも、少さきも、勢ことなる物にて、さのみ思ふまゝに見いだし候へど、能目つきも、恐しくなり候、悪き目つきなれども、なつかしう、うら〳〵と見出し候へど、よく候。

鼻は、人の顔のうちにさし出て、高く、目に立ものにて候、あひかまへて〳〵白くれん氣はひ候まじく候、さし出て見にくゝ候物にて候。

御口は、よくも悪くも、もてなしにて御入候、如何に、よき口つきも、思ふさまに、悪みひろげ、咽のあな見ゑ、したのひろき口わきより、あわふくたりて物云へど、いかにうつくしき口つきもあしくなり候、又悪き口つきも、のど〳〵と(シツカニナリ)物うち云ひ、又をかしき事も、うちゑみたるにくからず。

人の顔持、大事に候、けゝしく、人はぢたるさまにうつふきたるも悪し。又さし仰向てかはふりあげたるもわろし。元より小首ひねりて様わり氣なるも見にくし。なにと無氣にて、うら〳〵と向ひたるぞよき。

かまへて〳〵めしつかひ候はんずる人、上を下に、下を上に、わが御心にかなふとて、召使ことあるまじ、人うらみをなすものにて候、ゆめ〳〵御心にあひたるとて、我儘に召つかふべからず。

あした、さのみよるかゝられきて、人遣のきびしきも悪く候、又あまり、あさいねひさしきも、きたなき物にて候、能程に御ひるなりて、御てうづ、さるていに御さたあり、御宮仕人も、御あるしも、御鏡御覧して、御ぐしをときくだし、眉のそゝげたるを、御のごひなどして(下畧)

御すゝりなど、人のめし候はんに、文臺の御硯なら

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ぞ、其上に、もとよりわりとも、料紙など御添候て、參らせられ候へ、又硯ぞかりなれぞ、蓋をあけて、其蓋のうへに料紙御置候べし、料紙そへぬは恥なり。

まれ人など、參候はんに、御對面のことは、いかに久しく候ふべき人にても、初はちとひきつくろひ、衣粧などをもあらためて、置ものなど、有可かしく、御あひしらひ候へ、名もくにだにも、はしめさゝめきと申候事にて候（下畧）

御手、いかにも〳〵うつくしく、遊ぞし候へ、さりとて、此方彼方さのみにおそぞし御ちらかし候まじく候、文人の花にて候。

御上書の事、むかしは、大かた、我身同輩にも、またば兄弟などにも（參）とかき申候、ちかき頃、色々御さだめ候ひし時、御あつかひ候は、御しうへは、御ひろう、一家のしう、たやかたなとへは、申給へ、その下の上らうへは中らうの方より申給へ、上らうの方より、中臈へは參、上郎の御なかは參るべしとあり。

御むすめ、ろたて候事、十ぞかりにもなり候はゞ、奥深く、人にみせられ候まし、心もちうらやかに、聲ひきく御そだて候へ、あらるるまゝにくるはせ、物いひしとげなく、端近にうちふしなど、させらるまじく候、惣じて人すくなき路わりく事、又大勢うちまじり候をりなど、御心をそへて、御見はなつましく候、かやうの事、母親の心持に有事也。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

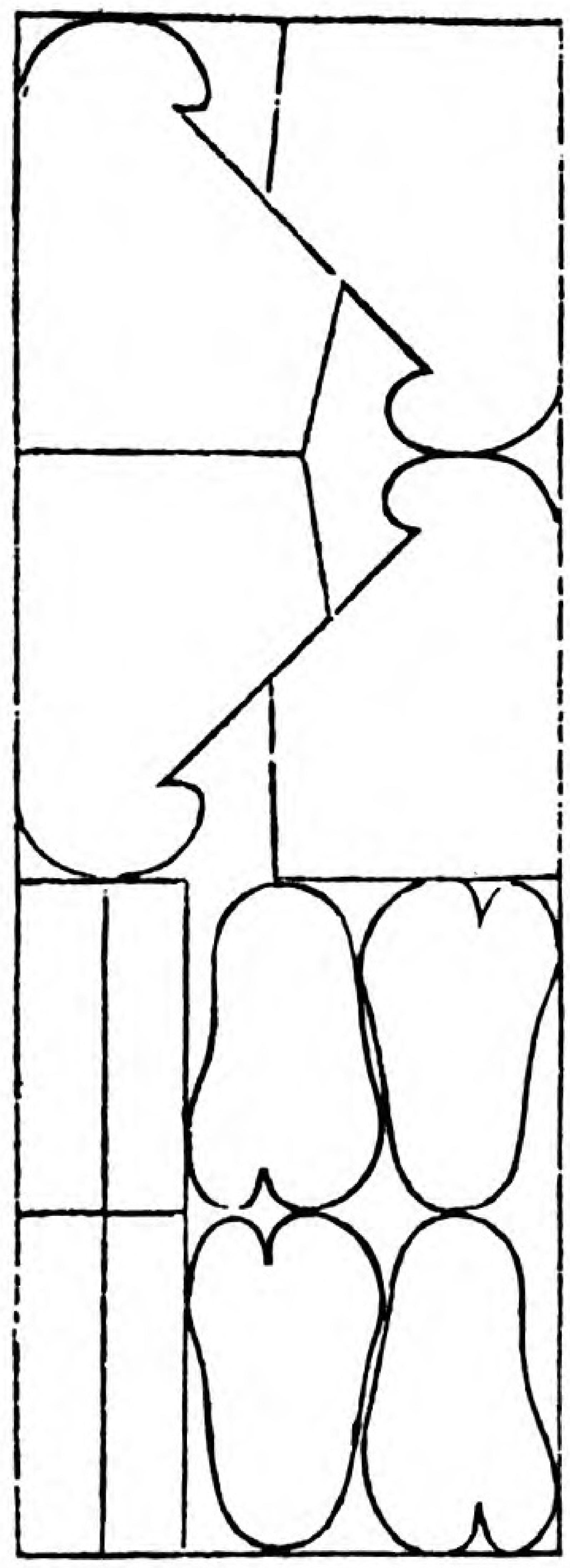
たちぬひ

西山たい子

（七六）足袋の裁ち方

足袋を裁つには、まづ三個の形を要す。一つは底形、一つは内甲、一つは外甲にて、此の形は賣りをるものなれど、大方、幾文にてもよろしきを買ひとゝのふれど、また足袋をときて、少しあつき紙にあはせて、自ら裁ちれくもよろし。左に載せし圖には、みな同じ切れにてたちあれど、是はたゞ形を示したるのみにて、甲切れ、底切れ、且つ裏表、切れを異にして裁つなり。まづ、表甲切れを眞岡木綿、きやらこなどにすれど裏は地あらき木綿を用ゐ、また男もの、紺足袋なども、表甲切れは、こんのめくらじまを用ゐれど、裏には淺黄木綿を用ゐ。其他ふとり、きぬなど表のよろしきものにも、それぐ\裏を見はからひて異にすべし。底に用ゐる切れの雲齋にも、地のあらきと、細かきとあり、そのあらきを裏とし、細きを表とすべし。また、あたゝかならんがために、もんぱなど仕ふもあり。ろれには、表をもんぱとして、裏を木綿とするあり、または、裏をもんぱになして、表をきぬ、木綿きやらこなどつくるあり。何れにても、人々の好みなれど、この切れはいたくよごれ易きものなれど、表にしては、塵もつきがちにて、またあたゝかく覺ゆるふしもうすけれど、裏をもんぱとする方增さりなんと思はるゝなり。

さて、その裁ち方は、まづ切れをのべしれきて、其の上に、形紙をのせ、形のずらぬやうによく合せ裁つべし。よく圖を見合すべし。



造花

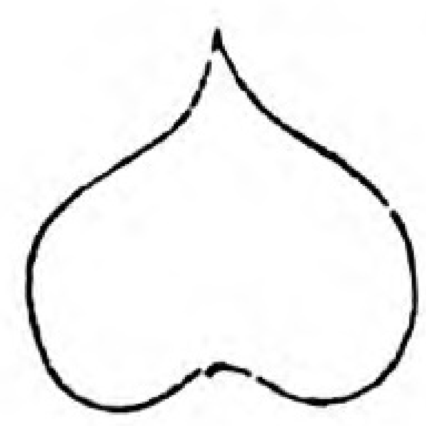
共立女子職業學校教授
伏見藤三郎

綿花

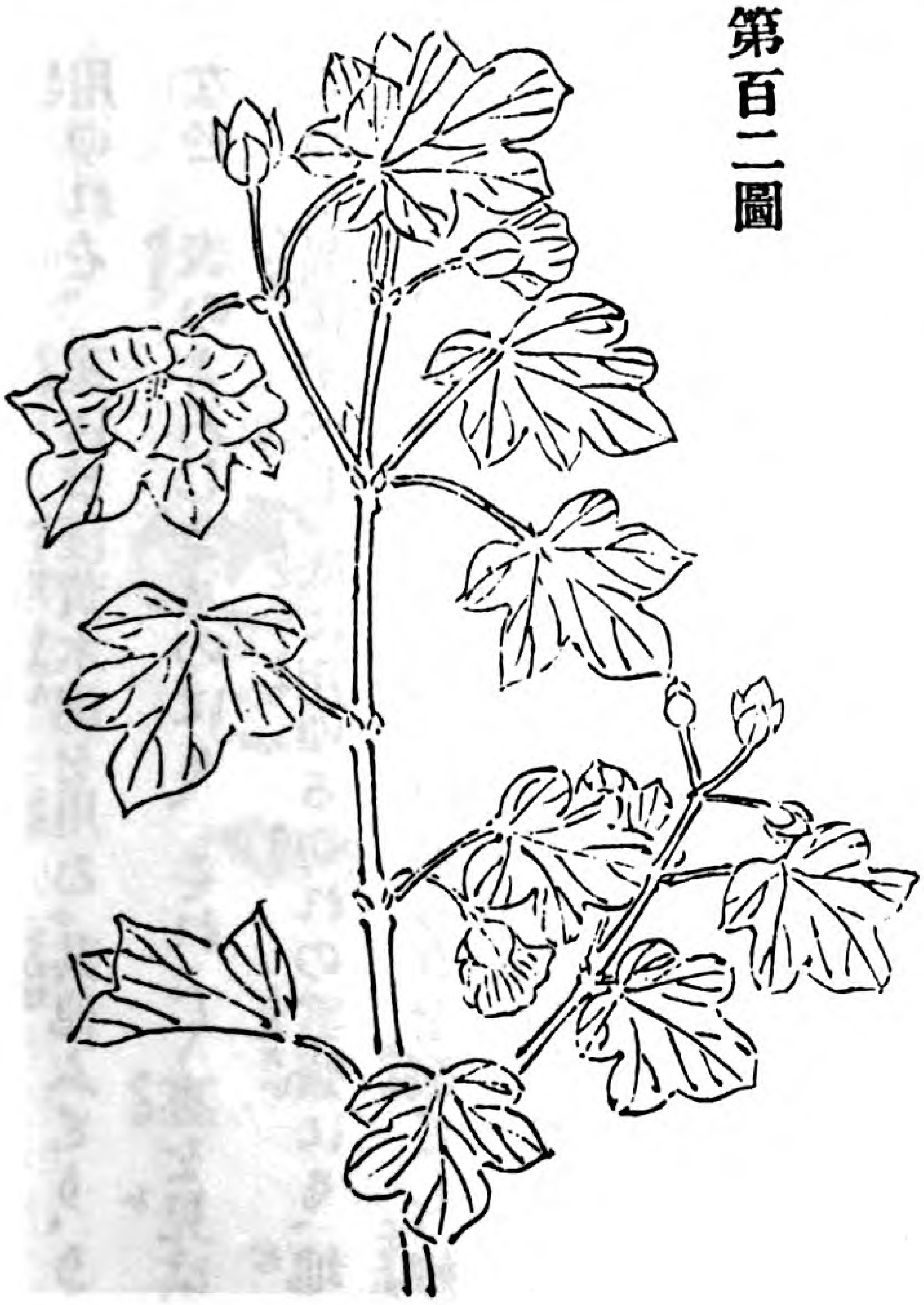
滿開花の造り方、綿は前號に掲げたる芙蓉に能く似たるものにて、造りかたも大概仝じ樣なり。花瓣は、紈、又寒冷紗を用ゐ、色染、斷ち形、鏝のあてかた等べて、芙蓉に仝し。蕚は、櫻の蕚と仝じものを造り、之に花瓣五枚を配り着く、別に寒冷紗を第百一

圖の如く斷ちて、通常の葉色に少しく薄くろめ、乾して后、之を中央より縦に二つに折り、櫻の葉を造りし如く。布ぎれにて覆ひ、手のはらに敷き、他の手にてきれのはしを廻し引きてしぼりをいれ、此を前につくりし蕚の上に、三枚をくむり三方より糊にてはり着く。

第百一圖



第百二圖



半開、蕾、芙蓉と仝じに造りてよし。

葉は　普通の葉の色にそめたる寒冷紗を、實物に見合して適宜の形に斷ちて造る。他みな芙蓉に仝し。

葉は出來上りてのち、表より蠟を引きて光澤を付くべし。

だいどころ

鳩の燒方

鳩を料理するも、前の如くなれ共、足はきらず、一方の腿にあなをあけ、之れに足を通し、洋芹、胡椒、麵包粉、牛酪、食鹽等を混合せ、之れを腹部に詰め投れ、金串にさして火に掛け、凡一時間程、同じ火氣にて燒くべし。但し鳩は、脂膀分少なきものなれば、之れを燒く時、全身に度々牛酪を塗るべし、而して燒上りたる時は、深き皿に盛り、肉汁をかけて出すべし。

雉の燒方

雉を拵へるも、前同樣なれ共、其首をきり落さず、之れをまげて翅の附根の間に指込、兩翅もまた二つに折り、其端を折りかへして金串を刺し、兩脚も之れを束ねて金串に刺し、武火にて燒くこと三四十分間にて、燒上りたる時之れを深皿に盛り、牛肉ケレー、燒麵包粉、ソース抔、能程にかけて用ふべし。但し雉も、脂膀少きものなれば、牛酪を度々塗りて燒くをよしとす。

越瓜の揚方

越瓜の皮を剝き、凡十四五分間程煠でたる後、あげて水氣をぬぐひ、しんを去り、能程の大きさにきり、之れによく溶したる鷄卵を、筆にてむらなきやうに

塗り附け、其上に、麵包粉をまんべんなくふりかけ、牛酪、または沸騰ちたる豚の脂肪の中に投れ、二三回かへして、六七分間あげたる後、箸にてとり出し、脂肪氣を乾かし、蠣ソースをかけて用ふべし。



おのれ、此の春の初めつ方より、脳をわづらひて、此の學園の筆も、え取らずありけれど、妹なるふく子が思ひつきにて、万葉集と八代集との中のあはれなる歌とおぼえたる限りをつぎ〳〵に取り出で、その詞の色、意匠のにはひなどをかいつけゆかむとて、秀歌集と題して、既に五回をさへものしたる由、その思ひつき、面白けれど、おのれ、今度新たに、その後をうけて、八代集のみならず、なほ、二十一代集はもとより、近き世の勅撰ならぬ歌集にも立ち入りて、あはれにおぼえたる限りを拾ひ出でんとす。

秀歌集（六）

塩井正男

けふよりはかへり見なくて大君の
　しこのみ楯と出で立つ我れは

○この歌は、萬葉集の二十の卷にありて、防人のよめる歌なり。防人とは、昔、筑紫を守る軍人のことをいへり。○かへり見なくて。かへり見ずしてといふことにて、即ち、一筋に天皇陛下への御奉公を思ひて、その他の私事、即ち父母の上、妻子の事、我が一身の上などの事を思はずしてといふことなり。○大君。天皇陛下の御事なり。○しこのみ楯。守りといふ意なり。楯は身を守る具

なれた、天皇の御身の守りといふ意より、防人をみ楯といへるなり。みは、美稱に添へたる詞にて、しこは、契冲阿闍梨の云はれし如く、醜の義にて、自らを卑下していへる詞なり、○出で立つ我れは。我れは出で立つと、上下して見るべし。

○一首の意は、今日よりは、家の事、我が身の上、すべて私の他事はかへり見ずして、一筋に、我れは、天皇陛下の御守りに出立ち行くといふことにて、君を尊み君を思ふまめやかなる日本心の　あふれ出でゝ、誠にいふばかりなく、あはれなる歌にこそ。

○

あめつしのいづれの神を祈らばか
　うつくし母にまたこととはむ

○これも、仝巻に在りて、同じく防人のよめる歌なり。○あめつしの。あめつちの、即ち、天地のといふことなり。つしはつちの訛りたるなり。○うつくし母。かはゆき母といふことなり。うつくし妹などいふと仝じ詞づかひなり。○こととはむ。ものいはむ或はもの語らむといふことなり、問ふ意にはあらず。

○一首の意は、天地の間の如何なる神を祈りなば、かはゆき母に、また、ものいふ事が出來べきにやといふことにて、防人と成りて、筑紫の方へ出立するにつけて、いとほしき母に別るゝを惜しみたる歌にて、母を思ふ子の情愛、あふれ出でゝ、誠にかなしき歌なり。

○

あしからの八重山越えていましなば
　たれをか君と見つゝ忍ばむ

○この歌も、仝巻に在りて、上總の國の大椽大原眞人が京に向つて出立せんとせる時に、郡司の妻女等が、別れを惜しみて、よめる歌なり。○あしから。相州の足柄なり。○いましなむ、去にたまはゞといふことなり。○八重山。山また山と、山の重さなれるをいふ。○見つゝ忍ばむ。見つ見つ忍ばむといふことにて、且つ見、且つ慕はむの意なり。

○一首の意は、君が、足柄の八重山を越えて、去に給はゞ、妾たちは、誰れをば君と見て慕はうことぞ。誠に名殘りをしといふことなり。何と取り立てたることはあらねど、やさしき女子の心情こぼれて、何となくやさしく風情ある歌なり。

○

なにはとを漕ぎ出て見れば神さぶる
いこま高ねに雲ぞたなびく

○これも仝巻にありて、おなじく防人のよめる歌なり。○なにはと。津の國なにはの港なり。此所より舟にのりて、筑紫の方へわたるなり。○神さぶる。神々しきことなり。○いこまたかね伊駒山の高峯のことなり。

○一首の意は、難波の港を漕ぎ出でゝ、ふりかへり見れば、神々しき伊駒山の高嶺に、雲がなびくといふことにて、故郷の方戀ひしさに見かへりたる所が、伊駒の高嶺に雲のなびき都の空も隔たりゆき、まして故郷は、さかりはてたるけしきにて、誠に言外に故郷を戀ふ餘情こもりて、風情いふばかりなくあはれなる歌なり。

○

そのこやも空しかるべき萬代に

かたりつぐべき名は立たずして

○この歌は、萬葉集の六の巻にありて、山上憶良が病床にてよめる述懐の歌なり。○をのこやも空しかるべき。男子が空しかるべきか、空しかるべからずといふことにて、やもは反語なり。

○一首の意は、男子たる者が、萬代に長く語り傳ふべき名をあげずして、徒らに死ぬべきものなるか、死ぬべきものならずといふことにて、此の歌は、三四五一二句と句を置きかへて見るべし。

五十歩百歩

孟子、梁惠王篇、孟子對梁惠王曰。王好戰。請以戰喩。塡然鼓之。兵刃既接。棄甲曳兵而走。或百步而後止。或五十步而後止。以五十步笑百步。如何。王曰。不可。直不百步耳。是亦走也。



二十一代集七夕歌寄（三）

落合為誠寄贈

故人藤伊季輯

後拾遺集

一とせの過つるよりも七夕の
　今宵を如何にあかしかぬらん　　小辨

いとゝしく露けかるらん七夕の
　ねぬ夜にあへる天の羽ごろも　　大江佐經

七夕に麻ひく糸のみだれつゝ
　とゝくやけふの暮を待らん　　小左近

七夕はくもの衣をひきかさね　　堀川右大臣

かへさてぬるや今宵なるらん

天の川と渡る船のかちの葉に　上總乳母
おもふ事をも書き付くるかな

秋の夜を長きものとは星合の　能因法師
かけ見ぬ人の言ふにそありける

七夕の逢夜の數のわひつゝも　橘元任
來る月毎の七日なりせは

待得たる一夜はかりを七夕の　右大將通房
逢みぬ程と思はましかは

忘れにし人に見せはや天の川　新左衞門
いまれし星のこゝろ長さを

たまさかに逢ことよりも七夕は　小辨
今日まつるをや珍らしと見る

金葉集

萬代に君そ見るべき七夕の　土佐内侍
ゆきあひの空は雲の上にて

たなはたの苔の衣を厭はすは　能因法師
人なみ〳〵にかしもしてまし

戀々てこよひはかりや七夕の　前齋宮河内
枕に塵のつもらさるらん

七夕にかせる衣のつゆけさに　中納言國信
わかぬ氣色を空に知るかな

詞華集

萩の葉にすかく糸をも蜘蛛は　橘元任
七夕にとや今朝はひくらん

七夕に心はかすとおもはねど　藤原顯綱
くれゆく空は嬉しかりけり

如何なれはと絶そめけん天の川　加賀左衞門
あふ瀬に渡すかさゝきの橋

天の川横さる雲やたなはたの　左京大夫顯輔

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

空たきもの丶煙なるらむ

覺束なかはりやしにし天の川　大中臣能宣
年に一度わたる瀬なれは

天の川玉はしいそぎ渡さなん　修理大夫顯季
淺瀨たどるも夜の更行くに

千載集

七夕の心のうちや如何ならん　攝政前右大臣
待にしけふの夕暮の空

七夕の天津ひれ吹く秋風に　大納言隆季
八十のふなつを御船出らし

七夕のあまの羽衣かさねても　肥後
あかぬ契やなほ結ぶらん

たなはたの天の河原の岩枕　源俊賴
交しもはてすあけぬ此夜は

新古今集

たはそらを我も詠めて彦星の　貫之
つま丶つ夜さへ獨かも寢ん

此ゆふへ降り來る雨は彦星の　赤人
と渡る船のかいのしつくか

年を經て澄むべき宿の池水に　權大納言長家
星合の影も面馴やせん

袖ひちて我手にむすぶ水の面に　藤原長能
天津星合の空を見るかな

雲間より星合の空を見渡せむ　輔親
靜こ丶ろなきあまの川なみ

たなだたの天の羽衣うち重ね　高遠
ぬる夜すゝしき秋風ぞ吹く

七夕の衣のつまはこ丶ろして　小辨
吹きなかへしそ秋のはつ風

七夕のと渡る船のかちの葉に　俊成

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

幾秋かきつ露のたまつさ　式子内親王
詠れは衣手すゝしひさかたの
天の河原のあきのはつかせ
如何はかゝり身にしみぬらん七夕の　入道前關白
つま待宵の天のかはかせ
はしあひの夕すゝしき天の川　權中納言公經
紅葉のはしを渡るあきかせ
たなはたの逢瀨絶せぬ天の川　待賢門院堀川
如何なる秋か渡りそめけん

東塢鶴聲（續）

朧昔生

齡、ヨハヒは、世といふことを綴べて、延の言を添たるなり。延は何にても、上をゆるくするの助語なり。

山子規、やまほとゝぎすは、山の郭公。山なる子規といふことにて、今、郭公にてあれど、山時鳥と、差別なくいふは、僻言也。古今は更なり。萬葉中に、子規をよめる歌、百二三十首に及べど、山郭公といへるは、四五首に過ず。しかよめるは、必ず山の用あるなり。古今の、我宿の池の藤波咲にけり山時鳥今か來なかん。なども、宿の藤波に向へて、山子規今やと、待渡る意也。此鳥時來れど、もはら里にも出で、鳴ものから、又更に鶯などの類にあらで、打馴て日數止まるものならねど、さる方より山郭公と打任せて、呼ならせるなり。菅家萬葉に。うとみつゝ留むる里のなけれどや山郭公うかれてはなく。などよめる、只郭公といふべきを、山郭公といへる始にやあらん。是も、ふとは、山より出たるを、里にとゞむる人のなきや、と

やうにも聞ゆれど、然らず。山といふに意はなきなり。味ひて知るへし。されど、八代集までは、さる心を大方用ひるぞ多き。

藤波、　フヂナミは、藤の本名にて、あながち、花に付たる名に非ず、フヂとは、何にまれ、蔓草の名にて、葛の字をも當たり。フヂ衣など、必ず藤の義のみに非ず。馬の鞭なども、必しなへたるツヅラを用ひしより、ブチの名ありと知らる。さる中に、藤はわきて、打靡ける物なれど、フヂナミの名を負るなるべし。

郭公に藤、鶯に梅、　郭公は、もはら藤の花に、やどらねど、心ありて、馴るやうに云は、打合て花咲ものなれどなり。卯花、花橘、皆同じ。依て讀合せたるに、二つの別ちあり、時にあへるをもて、見立て云ると、實に好して馴るとなり。譬ど、鶯の竹に馴たるは、實にて、梅に馴たるは、見立たるなり。此心得あるべきなり。萬葉十九、あけざれど榛のさ枝に暮されど藤のしげみにはろはろに云々と。郭公をよめる、上の榛のさ枝は實也。必さる木ふりの枝を好みて、宿るもの也。下の藤のしげみは時にあひて咲ものなれどなり。同十本高くはかつて木植じ郭公來鳴とよめて戀まさしむ。又、夏山の木末の繁に云々、などよめる實景也。

餘波、　ナゴリとは、風吹て後、猶波のゆり動くを云ふ。餘波とかくぞ、よく當れる。此詞六百年巳來、わかれを惜むといふべきを、ナゴリを惜むとやうにひがめきたれり。今もさのみいふめり、こは知れたる誤なから、世と相移れるなり。されど、別れの事に用ふる可ならんか。玉だれは、小簾の

枕詞なれど、玉だれと云て、小簾の事となれり。

タラチネは、母の枕詞なるを、親の事とせるなど、いと多し。代謝せる風俗、正しがたきものか。

フスブル、フスブルは、火のフス〱と、下なりに燃る音にて、それに様の詞の添へるなり。伏臥などの語も、さる方より出けん。古事記のトハスブ〱も、火のもゆる事なるべし。すべて詞は、聲より出たると、形より出たるとにて、互ひに轉々せるものなり。玉の聲をユラといへるは、形よりうつれる詞なり。

サイテ、サイテは、後撰の詞書に、紅葉と、色こきサイテとを、女のもとに、遣はして。とあり。サイテは、裂栲にて、和栲を、ニギテ。古栲をフルテと云に同し。タヘは衣の總名なり。

御菩薩池、菩薩は、要字類集に、假字ソロ井とあり。揃藺の略なり。六帖に、道のべにうろゐ刈はす莚うちさながら床に敷かとぞ見し、御菩薩池も、是を以て知るべし。菩薩の二字にこころなし。

昔生云、御菩薩池は、山城愛宕郡に在り。書言字考に、傳云、行基加㆓持于此池㆒、彌勒現㆓形於水上㆒故名、とあれども信し難し。本說の揃藺の略云々從ふべし。

忘貝、ワスレ貝といふは、貝の名には非ず。萬葉に、死したることを、家忘れたる、などいへれど、ウツセ貝、片ツ貝のことなるべし。

昔生云、讃岐に、忘貝といふものありと聞けど、いかなる貝にか、未だ實物を見ず。

高砂、タカサゴは、何國の浦にても、風の吹上に、年々に積る砂の山となれるをいふべし。今も海濱に高山となりて、松柏森茂せるが諸國に多し。さ

るは、高砂、砂山、濱坂など云めり。催馬樂に、高砂の、さいさごの、尾上にたてる云々、とあるや、物に見えたる始めならんか。こは、未だ山とまで、云にあらで、高きいさごの、さいさごのと、砂の方につきて、いへるなり。其後、砂積面成山など云漢文に、名のあへるをよみして、やがて、山の通稱として云事となれり。山は山にて、神代より事足れるを、今更ことわりにかへりて、云ふべきにあらねど、かくも全く山の別名となりけれど、さて有なん。扨後拾遺に、高砂の外山の櫻咲にけり、云々、なども、砂の名の方は、失なはれたるなり。花山にて、素性の歌に、山守はいはゞいはなん高砂のをのへの櫻折て歸らん。などあるぞ、打任せてよめる始めなるべき。其前つかたの方は、大方播磨の海の高砂などを云て、砂の方は未だ離れざりしなり。古今の、誰をかもしる人にせん高砂の云々の歌などは、播磨の高砂なるべし。かれも、さる高いさごの上に、松多くありしが、氣色面白きに依て、一所の名にも、云はやしたるならん。吹上を、紀伊にいひ、水無瀬を、山城に定めたるが如し。後世たゞ一株の古松をさして、高砂の松といふは、其餘波の殘れるものなり。

昔生云、臺灣の別名を、タカサゴといふも、原は高砂の意より出たる古稱ならんか。

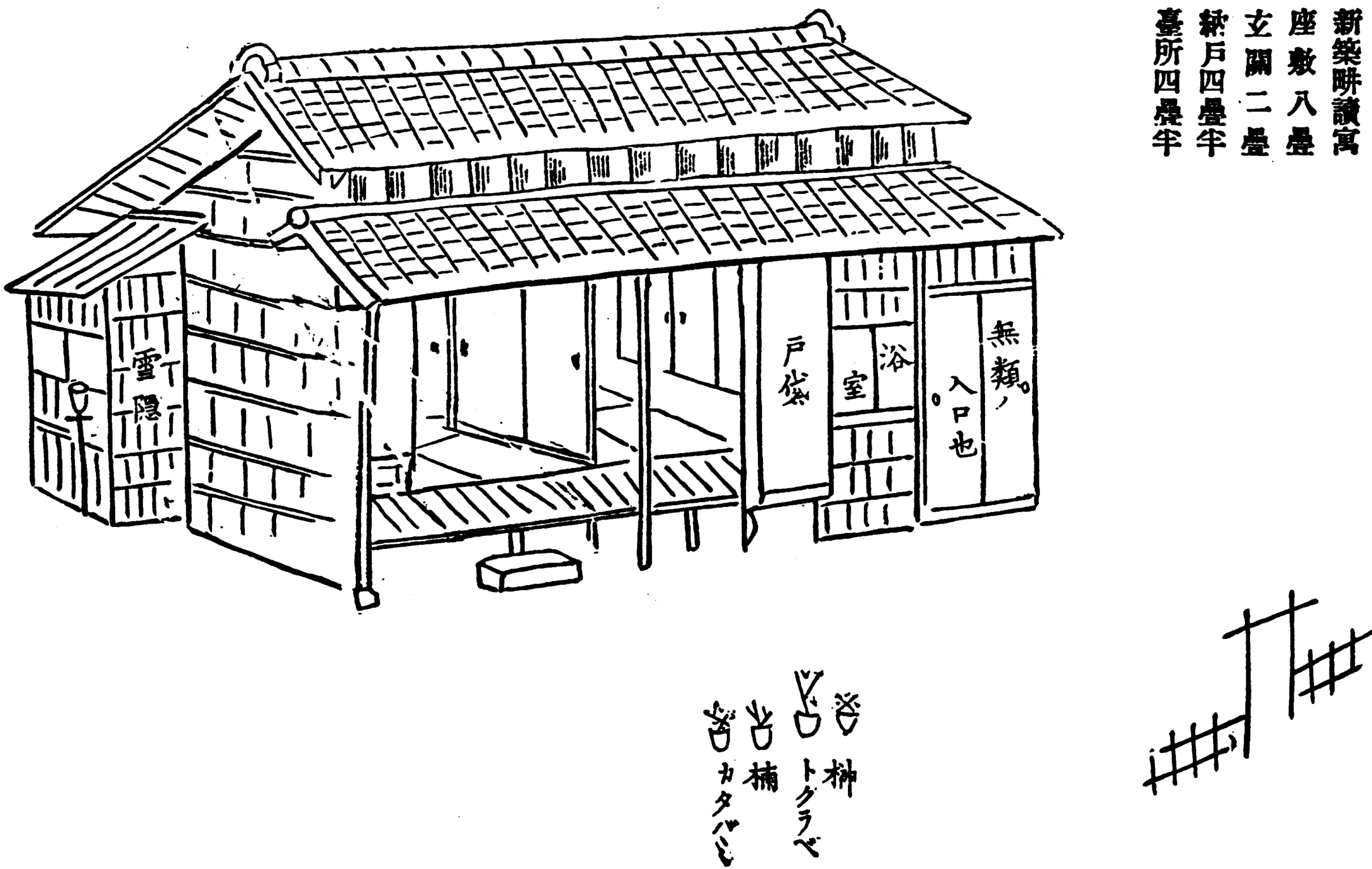
井蛙小錄

井上頼文

左の奇圖は、紅塵萬丈の中を遁れ、柳闇花明の地に清廬を結び、超然として洒書に耽る蕙堂柴田翁の新眺讀寓なり。翁　木筆を把てその光景を手寫し、予

第一圖

新築畊讀寓
座敷八疊
玄關二疊
納戸四疊半
臺所四疊半



が爲に郢贈せられたるもの。此の書もまた奇にして繩墨の外に超然たり。讀寫の搆造もまた奇にして人意の外に超然たり。



第二圖

夏月

水野水莖

夏の中頃となりては、日てりはたゝき、あせあゐてあつさたへがたけれど、たそがれどきになりては、やう〳〵人聲も玄づまりて、みどりの梢さとふき來たりたる夕風などは、いと心ちよし。今よひはと、しむしは玄ゐしてすゞむほどに、東の山のはすこしあかりて、やり水の色やゝしらみそめたるに、やがて光さやけくすみのぼりたる、先心もすゞしくなりぬ。ますかゞみなすすがたの中空に、たゞよひいでたるひかりの、ゐもいはれずきよきに、ひるまのあつさもいつしかわすれはてぬ。人どももろともにいざり出でゝ、月の光をめづるほどに、竹の葉わけのかぜすゞやかに身に玄みわたりて、夏こもみゐぬ夜のさまなり。かたみにかたりあひつゝ心をやるに、虫の聲さへすこしそはりて、秋にかよへらむ心地もせらる。あはれ世人は、夏の月よりも、秋のといひはやして、今よひのをかしき影をもよそにみるらむ。されど、きにあひて、こゝろもことに清くればゆるは、このすゞしき影にこそ。このみ〳〵にひかるゝかたわ心にはあらめど、このみじか夜のふけやすきをぞかこゝあへる。

河祭（七月二日）（其三）

西海坊

猿も木よりといへど、河伯も水にといひたさ様なれど、いまだ河伯の水に溺れたるを聞かず。河伯はたしそ無きか、これと相撲さへ挑みあひたる人の多かるをいかにせむ。河伯はたしきあるか、動物學者の標本にさへなきをいかにせん。はたして神の眷族か。

はたして心の迷より成れるものか。あやしきや河伯。

關東にてはカツパといへど、おのが國にては濁りてガツパといふ。このガツパは、四國九州にのみ住ふものなりと、古よりいひ來れるものなるが、いかにや。おのれは、村人の見きといふ實談を直接に聞きたればこゝに掲げむ。

この某（現存の人なれば名をば省きつ）、今年四十四五ならんか。若き頃は、常に好みて相撲など取りたれど、宮相撲（おのが國にては、氏神の祭典には、多く奉納として纏頭相撲花相撲を催すなり。この時には、醉客なども褌ひきしめて、土俵中に入りて、いど面白し、もとより一日限の相撲なれど、よきもの來たらず、百姓中の強きものと、相撲商賣の下手のみ多し、夫より木戸錢なき相撲を總稱して宮相撲といふ）にてはあまり恥からぬものなりき。

南洲翁か、ふとしたる出來心より、錦の御旗にわられなす彈丸うちかけて、畏くも、明らけき大御代に、一點の瑕を止め、九州の野に陣馬の蹄を止めて、今もなほ、隆盛奴がとの觀念をつぎこましめしは廿年の昔、おのが二つの頃なりき。この後は、相撲殊に流行したりけれど、某もそこかしこに招かれて、土俵の上に胡座かくことも多かりき。頃は宛もこがねとらかす七月の半、けふも招かれたれど、心地常ならねど、午後二時頃、暑もいとたへがたけれど、忍びて歸らんと、恨めしく菊地川の清き冷しき流をながめつゝ、堤の上に來かゝれり。折から何處より來たりけん、七八歳頃のケシ坊主（五六年前まで、子供の頭に髪をそりのこしたるものにて、今も田舎にては時々見受けらる）「相撲とろ——〳〵」といひて、しきりにつき來ぬ。うるさけれど、否むも卑怯なり、相

撲取の一分立たず、かつは好奇心より、いで目に物見せ呉れんとおもひて、いざ勝負せんといひて、秘術をあらはしたる甲斐ありてか、河伯を投げつけぬ。しかるに「キヰー」と一聲悲鳴の聲をあぐると共に、無數の河伯飛び來りたれど、こはたまらじとおもひしをもて、家に走り歸りて、臺所に身構へぬ。父はあたかも、華胥の國のそこかしこ巡覧しけるが、いと騒がしければ、打驚きさむれど、おのれ臺所にたちて、頭の毛さか立ち、眼はつり上りて、空にむかひてしきりに「コイ／＼」と呼はり居れど、これ必ず物怪ならんとおもひて、社司の宅より幣かりうけて、臺所に入られぬ。入るとひとしく、河伯は逃げ出しぬ。こは仕損じたりとおもひ、おのれ逃さじといひて追ひ行きしも、橋の上より河に皆飛込みて姿をかくしぬ。後にて父は、その時の汝がかたちは、鬼にもひとしきかりきといはれき。

以上は實談なり。世にかゝる談のおほかれど、おのれは容易にうけひかざりしも、かねて相知る且村の人の實談なれどかゝげつ。

肥後米といへど、誰も知らぬことなけれど、實は、菊池米ともいふべきものにて、肥後全体が、かく品質のよきといふにはあらず、この菊池米に灌漑するは、この菊池川なり。おのが里はこの菊池川に臨めり。この川は、流いとゆるやかなれど、古より、十人おぼれざれど霖雨も晴れずといひ傳へる位にて、毎年霖雨中に、四人五人溺死すること通常なり。河祭といふは、よく運輸に便に、灌漑によろしきをもて、河神水岡女神を祭るか、或は河伯の爲に取らること恐れて祭るか詳かならず。

一村落大概は全日なれど、或は便宜に從ひてなして、

十日も後るゝものあり。昔は大概七月二日（半夏生）にするなり。これらより考ふれど、いとたへがたき霖雨の晴るゝことゝなる祝なりけんか。團子、鮨、御酒、鮮魚肉、これらはまづ普通なり。これらの品は、凡て河神に供するなり。如何にして供するかといふに、圖の如きものを拵らへて、これを河岸に立つるなり。



一は麥藁をうつくしく束ねて苞をつくり、これに種種のあまなからな、はたの廣物狹物を入るゝなり。二はカケグリといひて、女竹を二節ばかりに切り、上一節を薄く削りて、その尖端を曲げて下ぐるに便にし、御酒を入るゝなり。こは二つなり。

麥藁苞と二つのカケグリとは、竹に結ひつけて立つるなり。

さてこれを河邊にたつる人は、大概子供にて、立て終りてまさに歸らんと踵をめぐらすと共に、仝輩の腕白子供は、これを取らんと爭ふ、素より爭ひては水中に飛び入りてなほ爭ふなり。されど、素より食はんとにはあらず、只水中にて游泳して、充分の働をなすは、子供にはかたきことなれどそれを仕れはせんとするものにて、余程おもしろきものなり。一つか濟めどまた睦まじく遊び居りて、また一つ立つ

れどまた各雌雄を爭ふさま、まことにをかしう覺ゆ。また立てたる人は、たとへ如何になるとも、決きてふりかへりみることあたはず、その儘直に歸るを常とす。もし一度にても後を見るときは、河神はこれをうけずといへり。

おのれこれを考ふるに、腕白子供のこの爭は、實に舊幕時代に於ける游泳奬勵法にはあらざりけんか。十四五歳以下のもの水庭ふかき處にての働は、容易く出來かたきものなり。多少立泳など心得ざれど、この仲間には入りかたし。

才くらべ（七）

蓬生屋女史

寂蓮法師が才

寂蓮法師は、俗名定長と云ひて、俊海の子にて、定家卿の從弟なり。始め俊成卿養ひて、己が子となし、中務少輔に任せられけるが、定家生るゝに及びて、自ら避けて僧となり。名を寂蓮と改めたり。いとけなきより、才、人に秀ぐれ、丹青をよくし、殊に和歌に巧みなるを以て世に稱せられけり。其頃、寂蓮がよき友に、顯昭と云ふ僧ありけり。その僧もまた和歌に熱心にて、大に自負したり。つねに二人うちよりては、互みに和歌を戰はして樂みけるが、顯昭は博學多識にして、學びの海いみじう博く究めしかど、才思少しく及はず、寂蓮は文學はなけれど、和歌はよに並〳〵ならずよみ出でゝ、顯昭、いつも、自負の鼻をそがるゝ事多かりしに、ある日、例の如く歌よみかはして、またも己が歌の、已れながら低く思はれしものから、寂蓮に對ひて云ふやう、和歌は藝に於て、いと安きものならん。寂蓮學ばずして

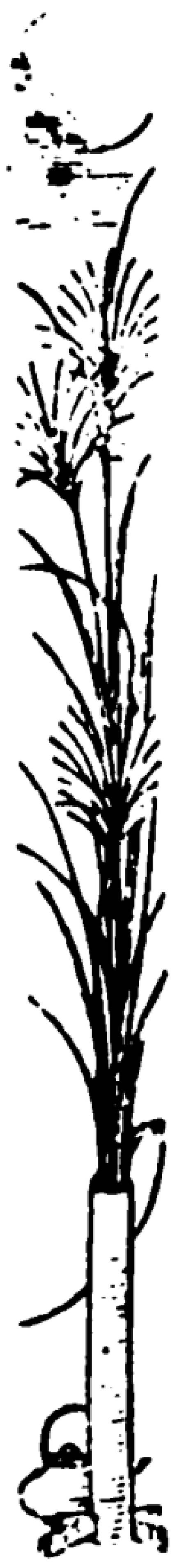
なほ、よく、歌をよくす、されど、決してむづかしきものにあらずと云ひけるに、寂蓮もれくれず頰を叩きて曰く、天が下に、和歌ほどむづかしきものはまたとあるまじきなり。顯昭の博學すら、なほ且つよくする能はざるなりと言葉かへしけるに、顯昭また云ひかへさん言の葉もなかりしとぞ。

平清盛が頓才

清盛入道は意氣尊大、よく人を輕蔑する人なるが、また、よく、周章る人なりけり。平治の亂に、義朝、其の子惡源太等と郁芳門へ押しよせて來れり。平家は六波羅に陣をかまへ、五條の橋を毀ちよせ、垣楯を搔いて待つ處に、源氏よせ來りて、



鬨をどつと作りけるに、清盛鯢波に驚きて、にはかに物の具をせられけるが、心あわつるまゝに、冑を取つてうしろざまに着たり。侍士ども之を見て、御冑逆さまに候と心づけ申せど、清盛もさはと思ひながら、流石に大將、臆して見ゆらんと思はれけん。中々に正しもなほさず、主上渡らせ玉へど、敵の方へ向へる君をうしろになし參らせんがかしこさに、かくは逆さまに着るぞかしとて、わざとおちつきて見ゐけりとかや。よくもにはかに心のあわてを靜め、おくれをかくしたりしいみじさよ。



奇談一笑と云へる書あり、白駒岡先生の著にして、漢文なり。今、之を摘録して、通俗体にあらため、讀者の一笑に供す。

笑話

かゝみ

よくのくまたか、またからさける

或時、鷦鷯、雕にむかひて云ひけるは、われ昨日猪の肉を食ひけるが、いと美味かりき、汝もまたかねて食ひしことありしかいかにといふに、雕はいぶかりて、汝は如何にして猪の肉を得たるぞと問ふ。鷦鷯いふ、われは猪の耳を鑽りて腹中に入り、心を攫み膽を啄み、かくして之を獲たりといふに、雕されど汝と共に出立たむ、われもし猪の肉を得ること能はずど、衆の鳥類に侮られむ、われたゞに已ひべきやはとのゝしりて、やがて鷦鷯と共に谷中を翔けまはりけるに、折節二匹の猪、岩の下に並み伏せるを見出でければ、雕は鷦鷯に向ひて、汝が獲るところはたゞ一匹のみ、我は一擧にして二匹を獲む汝はま

た他猪を獲よと、云ひもあへず翼を鼓して下り來り、直に二猪をならべ攫む、猪は驚きて起ち上り、左右に相背きてくるひ奔らむとす、雕は之をやらじと固く持ちて放さゞりけるに、力得堪へずて遂に股を引裂かれて死にけり。諺に、慾の雕股から裂けるといふは玆にはじまれりとなむ。

かはづのりうぐわん

蛙ども多く聚りて相談りて云ふ、手、足、からだ、耳に、目に、口に、鼻に、我等みな人間と相異ることなし。然るに、ひとり人間を以て、生ける物の中の最尊きものとするは、たゞ立ちて歩行くが爲のみ、若し我輩能く立ちて歩行かむ、なに人間に劣れることのあるべき、今淸水寺の大士に祈らむ、いと靈驗ありと云ふ、いかでか往きて禱らでやはあるべきと、議り定めて、こゝに倶々に淸水寺に詣で、懇に禱ること七日七夜に迨ぶ。大士その至誠を憐みて、皆人間のごと立ちて歩行かしめけれど、蛙ども甚く喜びて、おのも〳〵已が池に歸らんとしけるに、その手足は前の方に向ひてありながら、その眼は反つて後の方に在りて往來心のまゝならず。大に悔い恨めども、今更に如何とも爲し難くて、遂に皆餓ゑて枯死に爲りにけり。彼れ目前の利慾にのみ耽りて、後の害を慮らざる者を、世に蛙の立願とは云ふなり。

須磨の月（四）

白魚女史

まだ長月の夜の長きを知る年浪にもあらざれど、松風村雨の姉妹は、うき世の嵐、とくに聞きわきて、ともすれど、ねざめがちなり。今しも何に誘はれてか松風、ふと床の上に起き上り、「天地の何れの神に



祈らむかうつくし母にまたこととはん」戀しや母様とてつく〴〵と袖をしぼるを、他處にもえ堪へでや、はら〳〵と軒を叩くは、その落葉あはれなるに、村雨もまた何をか夢見けん、忍びてすゝりなく聲かなし。

あな、妹よ、何を夢見つる、夢見つるよ妹と呼び起す二言に、之もおどろきさむる床の内、さえ〴〵てまたねぶれぬに、外にも吹く風いとあらく、はゝその落葉しきりに軒を叩きて音す。

さても今宵幾日、頃は幾時にかありけんとて、さえさゆるまゝ、曉のいそがれてか、天戸くり明けて、軒近う天を仰げど、空は中々にさえも亘らで、秋深き霧のたちこむる中に、あはれ、まどかならぬ廿日あまりの月の御舟に、空艫にして啼き亘る厂の聲も、翅もいとおもく、物思ふ姉妹、見るに、聞くに、そゞろかなしさの身にしみて、つく〴〵と露おきまどふ折りふし、さや〳〵と庭の淺芽をふみ分くる音して、やがて、折戸を叩く音ほと〳〵と聞ゆ。二人は、なほ、まどかならぬうき世を月にうつして、他處心もあらぬ折戸を、またゝやほと〳〵と叩く音、流石耳に入りけん、ふと彼方を見れど、あやしき物かげの、おぼろにうつりて見ゆるにおどろき、さつとかけこみて、にはかに雨戸をしめきりぬ。うつりしはそも何ぞ。人か、獸か、何れ男鹿のたぐひなるべし。

さても、松風、何とて今頃、雨戸くりけるよ、あやしやと罵りながら庭に下りたちしは正しう母親の聲、折戸近く歩みめぐりて、やは、あやしき物かげ、誰ぞ早う、誰れにてもとくと呼はる聲に、いそぎてかけ來る婢女、召させ玉ふは何の御用にや、あやし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

き事にてもましまし候てかと、主母の氣を伺ふ女に答へもせず、きつと彼方を見つめて、顔うちしかめながら、なほ其處ら見廻す足の下に、何なるかれちてありしを拾ひとり、月にすかして彼方、此方、くりかへし見て、いよ／＼面しかめて、さてもけしからぬ。かねて聞きつる事の誠なりしか、まだいはけなし、まさかにと思ひけるものを、ゆだんのならぬとつぶやきながら婢女に向ひて、何も用事はなかりしなり。思はずもさわがしつるよ、まだ四更、とく行きていねよと云ひつゝ、己れも寢處へ引きかへして、先きの文うち披きて、くりかへし／＼よみて、さては、もはや幾夜も忍ばせつるにか、大それたる。父御に聞こえ上げなば如何に怒り玉ふらん。さりとて、かゝる大事かくすべき事にもあらじなどつぶやくを、屏風のかげにうち臥したりし婢女、はひ出でゝ、何事とゝふを、いな、何事にもあらじ、重ね／＼さまたげしつるよ、とく休みね、萬事は明日にゆづりて、我も一休みすれど云ひつゝ、寢間に入りし後も、何をか思ひくるしげに、枕かへしつ、折り／＼は太き息さへつきぬると、奥樣、何をわびさせ玉ふと屏風のかげより氣をはかる婢女の心もいとまなからん。



文林

初厂　　東久世通禧

ひとりねの寐覺さびしく聞ゆなり
夜さむをつぐるはつ厂のこゑ

厂未來　　久我建通

こし路にはまた秋風やたゝさらん
　待ともかりのこゑはきこえぬ

聞厂　鍋島直大

曉のねさめのとかにきこゆなり
　のきはの山を越ゆるかりかね

籬下虫　前田利嗣

ひろからぬ籬のもとにさまさまの
　虫の音たえぬわきの夜はかな

月前薄　高崎正風

我やどの一本すゝきにはのれもに
　なかくうつりて月かたふきぬ

納曾利の舞の圖に　本居豊頴

ものゝ音に雲はとまるを何しかも
　天のとわたりたつきはふらん

夜虫　津輕承昭

わさちふにつゆそれきゐて終夜
　鳴もよわらぬすゝむしのこゑ

島霧　長谷信成

さくらしま春のかすみに立かへて
　紅葉にふかきわきのゆふきり

初秋虫　小出粲

すゝしくもなりにけるかな鈴虫の
　はつこゑさそふのべの秋かせ

秋雨打窓　西三條實

虫のねもわはれをそへて更るよに
　まとうつ雨のれとぞみにしむ

草花露　宮地嚴夫

さきとさく千種の花のいろいろに
　置てそにほふ野へのわさつゆ

渡厂　阪正臣

をふねよふ大川みつにかけ見ねて
　我よりさきにわたるかりかね

水上月　植松有經
水そこにしつみて殘るつきかけは
　そらの白むもしらすや有らん

湖春厂　遠山英一
和田の原厂のゆくへをまもるまに
　いそ山かけはくれはてにけり

三輪義方
そこひなきみちを心にあぢはひて
　くめはたのしき木の芽なり鳧

夏龜　三浦千春
うき出てゝ脊をはす龜も見ゆる哉
　さみたれはれし池のみきはに

荷田蒼生女　佐々豐水

やましろのいなりの山のあや杉の
　あやに麗はし刀自かまこゝろ

月前遠情　足立正枝
さらしなや姨捨山のあきをしも
　こゝろに見せて澄める月かな

母をうしなひける時　五十嵐德文
ちりぬべき時ならなくに母そばの
　いかなる風にさそはれにけむ
引とめん術のなければまくらべに
　跡べにふしてなげきわびつゝ
術をなみこゝろうき雲かきくらし
　なみだは袖にあめとふりつゝ
よき時も見せてしがなと賴みにし
　こゝろあだにもなりにける哉

鹿島に詣てゝ　剩池眞澄

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

常陸帶わらぬかことにちはやふる
　神のみいつをゆめなけかしそ

常陸人西丸松陰翁の金婚式に　渡邊光風

千歳經ん色にそ見ゆれゆたかにも
　立ちならひたる松のふたもと

月前聞琴　松本操

月きよし琴のしらへもおもしろし
　いかなる人のすみかなるらむ

故郷秋　宇井正夫

見わたせは身にも憐のつとふなり
　わかふるさとの秋のゆふくれ

野萩　鍋島榮子

秋の野にみちはあれとも眞はき原
　ふみわけかたく露はおきける

秋山路　西四辻茂子

秋の香のにほへるやまの松はらの
　したゆく道のおもしろきかな

暮ゆく空に月出たり　柳原愛子

村からすねくらあらそふ聲の内に
　まつをはなるゝやまのはの月

田上广　日野西廣子

遠かたはきりにこもりて暮わたる
　たのもさやかに落るかりかね

閑居水聲　松平健子

わか庵のかきねをめくる水の音に
　心のちりもあらひてそすむ

筏　保科節子

杣川はおきゝりふかくたちこめつ
　いかたの棹やさしまとふらん

江秋風　中牟田常子
ちり浮ふ木の葉みたしてゆふ月夜
入江さひしくあきかせそふく

寐　高崎竹子
物思ふとねられさりける閨の戸に
あはれをそふる虫のこゑかな

月夜待人　小川直子
ちきりれきし人は影たに見えぬまに
稍かたふきぬやまのはのつき

溪霧　河村重子
小男鹿のこゑはほのかに聞ゆれと
あさきり深したにのしたみち

電氣燈　税所敦子
いなつまのかけをとゝめて燈火に
かふるもみよのひかりなり鳧

秋夜對月　小池道子
思ふとちものをもいはすなりに鳧
ふけゆく月のかけにむかひて

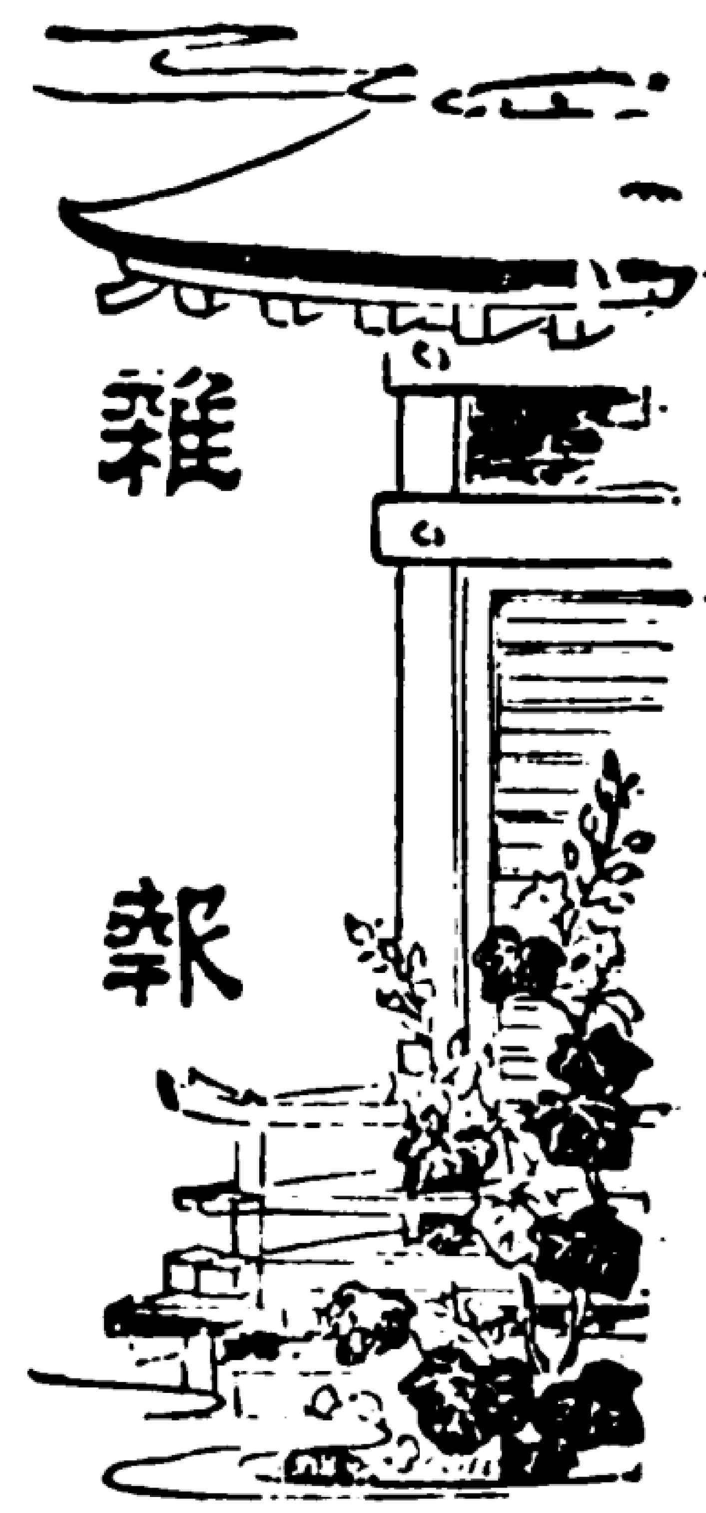
夜秋雨　遠山いね子
荻のはの音きゝなからいねしよの
ねさめ淋しくむらさめのふる

初秋雲　鶴久子
さためなくうき立雲のけしきにも
みゆるは秋のはしめなりけり

海邊煙幽　中島歌子
きのふけふかすかになりぬ秋の海
たえすなひきし舟のけふりも

月前燈火　内田遊歌子
霄の間は月にそむけしともし火も
ふけて光りのまさりけるかな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA



雜報

●れはみめぐみ　天皇皇后兩陛下には、客月以來、新潟縣下各地水害の趣き憫然に思召され、御救恤として金二千七百圓を下賜せられ、且つ慰問として侍從片岡利和氏を同縣下へ差遣はされたり。れはみめぐみのあつき、ことさらに記し奉もかしこしや。

●兩內親王殿下還御　七月廿五日より、日光山內の御用邸に成せられ御滯留御避暑あらせられたる、常宮昌子內親王、周宮房子內親王の兩殿下には、去る十一日御京遊ばされたり。

●和歌詠進　先般　陛下が京都に御駐輦ればしましゝをり、在京都の華族は、歌道の御獎勵を蒙り、特に御歌所を經ずして、直に詠進せられたる向もあるよしなるが、其の頃近藤芳介翁撰者となりて、匿名點取をなし、向陽會に於て開卷の上、宮中に捧呈せし和歌は左の數首なりと承る。

簾外橘　　正三位男爵　渡邊清

玉たれのゆらくまに〳〵かをるなり
はなたち花に風やふくらむ

從四位男爵　藤枝雅之

玉たれのみすうこかして吹ふ風に
れくゆかしくもかをるたち花

晩夏雲　　正五位　町尻量弘

ほともなく秋風たゝんあらましは
たゝよふ雲のいろにみゆつゝ

ゆふへ〳〵すゝしくなりて山のはの
雲よりなつのいろそくれゆく

●外山清子の碑　故正五位外山清子は　光格天皇の內侍なり。　天皇崩御あらせられし後は、髮をおろして世を過されけれど、　天皇の御忌日には、常に御陵に詣で、仕へ奉ること昔に變らせ給はざりしが、いぬる四月の頃、八十四歲にて身まかり給へるを、此度子爵外山光廉、其筋の許を得て、墓碑をたてらるゝといふ。

●京都帝國大學　は、去る十一日より愈〻開校し、同日はたゞ書類さし出し、及寄宿舍等の事を定めたるのみにて、翌日は日曜にて休校し、十三日は宣誓式を行ひ、十四日より授業を始めたり、新入學生は、第一高等學校卒業者最も多數にして、第二之に亞ぎ、其他の高等學校は幾ど同數なり、最初は四十八人內外の豫定なりしが、五十四名、即ち土木科三十名、器械工科二十名に達せり、敎室は、當分元第三高等學校の樓上を以て之に當てらる。

●歌人の長壽　何事にもあれ、學ぶことの淺けれど、奧は極めがたきものながら、わきて歌の道は、年に年を重ねて、かしらに霜を戴くに至らむ、自然に妙にも、くしくも詠み出づべし。然るに昔より歌よむほどの人はいのちながきためし多きこそ、此の道のためにもうれしきかぎりなれ。今の世にても歌人の長壽者を擧ぐれど、近衛忠熙公は今年九十歲、久我建通公は八十三歲、鈴木重嶺翁は八十四歲、加藤安彥翁は七十八歲、梅村宣雄翁は七十七歲、佐々木古信翁は七十四歲にして、稅所敦子刀自もやがて七十歲になり給ふとなん。

●鈴木重嶺翁の矍鑠　今の世の歌のひじりと稱へらるゝ鈴木重嶺翁は、すでに八十路の坂を越えられたるが、尙すこやかなること、なかなか壯なるもの

も及ばざるほどにて、日々朴齒の下駄からく〳〵と踏みならして、こゝかしこのうたむしろに趣かるゝといふ。

●大伴家持卿の千百年祭　越中國氷見郡布勢の圓山鎭座布勢神社の境内なる御影神社は、在昔越中の國守たる大伴家持卿の靈を祀れる所なるが、本年は宛も其千百年に相當するを以て、石田富山縣知事等發起となり、來廿二日より三日間、紀念祭を執行する事となし「家持卿」「布勢水海」の兼題を發し、弘く和歌の詠草を募集し居れりと。

●藤樹先生の祭典　來る廿五日、江州高島郡藤樹書院に於いて、中江藤樹先生三百五十年の祭典を催さるゝよしなるが、祭式は一切儒式を用ひ、齋主は土地の村長之をつとめられ、祭典委員二名は、此程京都に來り祭典用器の購入をなし、舊家出雲路氏に就きて種々古式を取り調べられたりと。

●とり女の孝事　埼玉縣大里郡畠山村飯野甚五郎の養女に名をとりといへる孝子あり。ことしは二十四歳になれるが、幼きをりより性質温良にして、養父に仕ふることまめ〳〵しかりけり。明治十三年の頃甚五郎病にかゝりて起居も自由を失ひしに、かてゝくはへてその翌年、義兄の歌吉といふも全しく病の床につきて永くねたゝすなりにけり。此の時とり女は僅か七歳になんなれりける、他にみとりするものもあらざれど、幼きながらも日夜介抱におこたりなく、なにくれとひとりにてとりまかなひける、家もと貧しきに、父兄二人とも病みたれど、活計いよ〳〵困難にして、朝夕の調度にさしつかふることもしば〳〵なるを、とり女看護のいとまをはかりて、近所の走り使ひ子守などしていさゝかの恵みをうけ、辛

くも饑渇を凌ぎしか、斯くの如くすること三四年、とり女はや十歳になれゝど、日中は人に雇はれて相當の賃を得、夜は紡績の事を習ひて夜更くるまでつとめいそしみ、十二歳の頃は農事の暇に機織の事なども覺ゑて、一家三人の糊口も、とり女一人の働にてやゝこと欠けさるにいたりたれば、とり女ますます奉養にいそしみ、日はひねもす夜はよもすがら、專ら家業を勵みて、父兄に良藥をあたへる事にのみ心をくだきけり。見るもの涙を流さゞるはなし。去る廿七年のころ、事そのかみにきこゑて、左の賞をたまはりたり。

飯野甚五郎養嗣女　とり

資性温良善く養父兄に事へ明治十三年中養父關節病に罹りて手足不随となり尋で養兄亦同症を患ひ一家操業者なく益々貧困に陷るも幼弱の身を以て父兄の看護に當り傍ら賃役を事とし或は紡績の業を營み漸やく長ずるに及びて農作機業を勵み奉養倍々努む其志操を變せざること茲に十數年洵に奇特とす仍而爲其賞金一圓五十錢下賜候事

明治廿七年五月二十一日

埼玉縣知事從三位男爵　千家尊福

世には、慈愛なる實父母の膝下に、何不足なく人となる子女もあるものを。あはれ孃たち讀みて如何なる感をか起し給ふ。

●本邦婦人米國の學位を受く

本邦婦人にして米國の齒科大學を卒業しドクトルの學位を授與せられたる婦人あり。千葉縣山邊郡眞龜村亡中村養庵氏の長女にして、名をやす子といひ、本年三十五才なり。先年米國チカゴ博覧會開設の際、洋服裁縫の目的を以て單身渡米したるも、事物風俗の異なる爲、遂に

其目的を達する能はざりしに、偶費府の一豪商に救はれて、其子女に日本服裁縫及日本語教授の任を托せらるゝに至りぬ。茲に於て、同女は大に感激し奮勵、以て費府の齒科大學に入り、螢雪の苦を積みて、本年四月、遂に同學科を卒業し、ドクトルの名譽を荷て、去る二十六日、無事横濱に入港の便船にて歸朝したりと云ふ。めでたきことなり。

●月日の駒　はあしかき早く、はや今年も半ばを過ぎて秋のもなかとはなりぬ。綠の色深かりし木々の葉も、いつしかもみぢの色を見せて、一風一雨さそひ來ぞ、一葉のこさすちり行かんとす。されど、草木はいくたびか、またこん春をまちいでゝ、行くさき永く花も咲かなん。嗚呼吾等は末永く、またこん春をまちいでゝ、花を咲かさん時ありや、過ぎにし月日はかへるべくもあらぬに。さて、この一年の半をも我等は如何にして消したるか。我が學の道は如何ばかり進みし。我が父母は如何ばかり老いたまへる。一往一來追想しなど、くやしかることのみ多からん。されど、吾等は、いたづらに、既往を追想して、かなしむのみにてやむべきや。すぎたるにかんかみて來らざるをいましめ。年を逐ひ月を重ぬるに從ひて、益々我身の德をつみ、いさゝか御國の鴻恩に報い奉らでやは。あはれ孃たち、年月は矢よりも早し。身は日一日と老いつゝあるに

◎女鑑月並兼題

十月五日　歌……雛菊　文　祖先の祭日に友を招く文　九月廿五日〆切

十月廿日　歌……海邊紅葉　文……茸狩の記　十月十日〆切

教の庭



九月廿日兼題　松間月

天　肥後國飽本市白川新屋敷町堀榮一方　木川里子

木末ふくあらしに雲ははらはれて
松の葉ごしのつきのさやけさ

地　但馬國城崎郡豊岡寺町市川方　川順子

白玉をたつのあらそふさまに似て
尾上のまつにすめるつきかけ

人　山口縣周防國佐波郡右田村　佐伯かめよ子

我か宿の庭のまつか枝しけれとも
月のかけもるひまはありけり

秀逸　（十五首）

山松の葉こしに見れとしかすかに　名取正代子
さやけかりけり秋の夜のつき

おもしろく十六夜の月いてにけり　錦織さち子
ときはの松のひまをもれつゝ

さやけさをなにゝたとへん住の江の　佐治房子
まつのはこしのあきの夜の月

あふきみる千代田の宮の松か枝に　中村稜威子
かゝれる月のかけそくもらぬ

もろともに見んとちきりし月影は　山田瑋子
人まつか枝にはやゝとりけり

ほの見えておくゆかしきは山松の　玉井隆子
葉こしにすゝめる秋の夜のき

あまの子か歸るいへちは暮はてゝ　岡田操子
いそまつか枝に月そかゝれる

千世までもみさを變らぬ松か枝に　江口とみの子
むかしのまゝの月ぞかゝれる

ますかゞみかけしとみゑて山松の　柳田里子
木の間もりくる月のさやけさ

老松のちとせのかけをみせんとや　日高かず子
月は葉こしにてりわたるらん

中々にくまなきよりもまさりけり　錦小路益子

千代をへし松にかゝれる月みれは
まつのはこしの三日月のかけ　竹内　頼子

頼ふへきものこそなけれ常磐なる
神代ながらのこゝちこそすれ　降田まさ子

あきらけきみ代の光もさしそひて
まつのはこしのあきのよの月　北村　孝子

うつし植ゑて待ちしかひあり我庭の、
松のこのまにすめるつきかな　廣田とめ子

まつのはこしの秋のよのつき

（以下原稿到着順）

わだかまる龍にまがへるおいまつの
つきはあぎとのたまとこそみれ　佐々小琴子

老い松のつゆにやどれるつきかげは
したたるばかりすゞしかりけり　佐々有鄰子

ゆふきりはあとなくはれて高砂の
尾の上の松につきすみわたる　佐山幾子

袖さむしいたくな吹きそこぬひさな
まつのひまもるつきのしたかせ　杉浦よし子

なか〳〵に少しくくまさなる松を
もれくるつきそさやけかりける　高橋きん子

松か枝にかゝれるつきのかげ見れは
きよふくるもわすられにけり　竹内正子

小夜ふけてにはの老木のまつか枝に
しつかにすめるつきそさやけき　柚木理子

生ひしけるやま松かけをもれ出づる
かけこそさゆれいさよひのつき　高島壽子

枝かはすまつのしけみのたえまより
さやかにいつるやまの端のつき　田中ねん子

ひるのまはをくらき庭のおいまつの
こすゑさやけきあきのよのつき　奘奈井芳子

ひまもりてひかりこきなる秋の夜の
まつのはこしのつきそさやけき　栗生喜久子

影たかくさしのほりたるすみのゑの
まつの葉こしのつきのさやけさ　木村きく子

むら雲のいつしかはれてうれしくも
まつのこのまもるゝつきかけ　中山かず子

山の端のまつの木の間にほのめきて
のほりいてたるつきのさやけさ　竹村てい子

さきはやま松の葉こしにさすかけは
もれ出つる月のひかりなるらん　坂田きみ子

涼しさをまつのしくつにうつしつゝ
たかくもすめるよはのつきかな　山手てい子

松がねにますみのかげは掛けにきさ
みねてますますすめるつきかな　徳永萬壽子

おほかたはきりの中なるやままつも
こよひはつきにあらはれにけり　永井さい子

おほぞらをさやかに照すかげよりも
まつの葉ごしの秋の夜のつき　春野椿子

やまさとはまつの木立のしげければ
木の間ながらにつきそ更けゆく　石内登美子

みねたかく松吹くかぜのおとたえて
こずゑをもるゝつきのさやけさ　上島龍子

世々をへし松にやどれるつきみれば
千代もくもらぬこゝちこそすれ　富士村ひさ子

みどりこきまつのはごしの月みれば
こころのくもゝはれわたりけり　富士村幾子

貫く露を葉ごとよみてつきかげの
さはにゝほへる千代のまつはら　田部里子

幾千代もかはらぬまつの木の間より
さし入るつきのかげのさやけさ　山浦たま子

松が枝をもれてでりそふつきみれば
こゝろのくもゝはれわたりけり　菫野露子

さやかなる松の木の間のつきみれば
くもらぬ御代のひかりみちぬる　深草みどり子

畫たくみもおよばじとおもふ松原を
もれくるつきのかげのさやけさ　白井さな子

月かげのけふもるみればまつのはを
きのふちらしゝかぜぞうれしき　下元もと子

なか〱にくまなす松ぞおもしろき
木の間をもるゝあきの夜のつき　野中あさ子

たちならふ松の木の間をもるつきの
かげさやかなるあきの夜半かな　白石椿子

さきはなる松の木のまをもるつきも
あきはあきなるいろにぞありける　上原能夫子

みつくきの岡邊のまつの木の間より
なかれにもりてやどるつきかげ　白石まさ子

三保の浦の波にもうかぶつきかげを
まつの葉ごしにみるぞさやけき　小林藤子

さやかなるまつの木の間をもる月に
葉ずゑのつゆもたまと見えけり　赤沼孝嘉子

花もみちいつれはあれどすなほなる
まつのこずゑのつきぞめでたき　薬師寺露子

かぜふけば露のたまちるまつかげに
ほのめきわたるゆふづく夜かな　長山てい子

かげやどる木の間の月にまつのえの
ちとせのいろもまさりぬるかな　矢島えい子

さやけしと人もめづらん我がやどの
まつまにみゆるやまのはのつき　金森さし子

さしおほふのきはのまつの枝しげみ
木の間ながらにふくる月かげ　中村正子

なか〱に松の木の間をもるきの
くまこそ月のにほひなりけれ　中村倭文子

そらたかくそびゆる松のえだゑけみ
かすかにもるゝ秋の夜のつき　山本ひて子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

したゝるゝ松のしつくにてりそひて
にほふ木の間のつきのさやけさ　河村さち子

うき雲もいつしかきえてすみよしの
まつの木かけのつきそさやけき　河村まさ子

友もなくあたりもいさゞしづけさに
みやまおほゆるまつの間のつき　綿野りき子

いつはあれどいづくはあれど秋の夜の
まつ葉にさゆるつきぞゆかしき　寺田まさ子

ゆふつきのまつのこすゑにきらめけは
いせゞこゝろもきよくなるかな　右田藤子

おほぞらにすむさきよりもつきかげは
まつの葉ごしに見るべかりけり　西　艶子

やま松のこすゑもりくるつきかけは
くまなきよりもさやけかりけり　和田八重子

かげたかき松の木の間をもるつきの
かけこそここにさやけかりけれ　眞島千鶴子

まつか枝のひまもる月を見るほさは
にはもやまへのこゝちこそすれ　佐伯みね子

千年へてみどりいろそふはままつの
木の間をもるゝつきのさやけさ　橋本たつ子

風そよくまつの木の間にあはれにも
ほのめきわたるつきいよきかな　福原菫子

月かけはまつの葉かせにくたかれて
しろかれしけるにはのおもかな　佐藤濤子

見るにたにこゝろの底もすみわたる
まつのこすゑにやさるつきかけ　氏家さもゑ子

久かたのそらもくまなくてりわたる
まつまのつきのかけのさやけさ　大田垣しん子

松の間にいてしこよひのつきかげは
入ることしらて千代やてらさん　園田しげ子

松の葉のみさをやめてんつきさへも
うつすかゝみのいさきよくして　田邊きよ子

浮くもはいつしかきえてさきはやま
まつの木の間のつきそさやけき　宮澤きぬ子

月もなほまつの木の間にやさりしは
くもらぬかけの千代やたのまむ　宮澤その子

山のはをはなれてつきのかけきよく
あふくのきはのまつにかゝれり　羽田三緒子

うちわたす松の木の間にもるつきも
あきはことこそ照りまさるなる　戸塚鐵子

やままつの木の間もれくる秋の夜の
つきのひかりのきよくもあるかな　池谷富子

あけちかのいさよふ月はやままつの
木の間にかけしかゝみなりけり　吾妻近子

あきかせも松のしらへにかよひきて
木の間のつきのかけそさひしき　諸井久眞子

影さへもみどりのいろに照りそひて
松の葉わけのつきのさやけさ　中桐杏子

山の端にほのめくつきのおもしろく
　まつの木の間にかゝりけるかな　絹服ます子

やま松の木の間にのほるつきかけは
　あきのあはれのかきりなりけり　小曾根しう子

まむかひはあまりさやけし秋の頃は
　まつの木の間のつきにしかしき　磯野たま子

立ちならふまつの木の間の月見れは
　いさゝこゝろもはやけかりけり　磯野こさ子

志賀の浦くもりなき夜はからさきの
　まつのひまもるつきのさやけさ　五百田ゆく子

庭の面をうちなかむれはまつの木に
　たくしらつゆのつきそやされる　小松不士子

住の江のきしにもちつきなかむれは
　まつのはさまのひかりさやけし　矢次くり子

千世へたるまつの大木のこのまより
　もりてさやけきつきのかげかな　宮地擎子

たち並ふまつのこすゑをもるつきは
　そらにすむよりさやけかりけり　近藤よし子

さきはなるまつのこのまをもる月は
　くもりなき代のかゝみなりけり　上野君子

松にふくみれのあらしはしつまりて
　こすゑにたかしあきのよのつき　近藤ふく子

さしのほる月をまつ間はあたなりし
　その名うれしまつのかけかな　大寺浪速子

のほるへきほさをまつまのみねの月
　しはしさみるそうれしかりける　稲田松枝子

ほさもなくのほりてみねむ東やま
　まつこの間のゆふくれのつき　稲田秀子

くもりなき鏡さやみむすみのねの
　まつのはこしにいつるつきかけ　千田瀧千代子

月はいままつのはこしにいてにけり
　よものうきくもふきはらひつゝ　千田きみ子

千歳ふるまつの木の間にかけもれて
　さやかにのほるあきの夜のつき　青木春子

みわたせは月かけきよしおのつから
　しらへもすめる千代のまつはら　岸せつ子

龍ささもにゆらく玉さも見ゆるかな
　老いまつか枝のいさよひのつき　仁保志磨子

みたらしにうつるも清しかみかきの
　まつをもれくる秋のよのつき　山本能子

色かへぬまつの木の間をもるつきは
　あらはなるよりをかしかりけり　弘田ゆき子

いつしかも山の端いてゝわかやさの
　まつの木のまにすめるつきかな　香川頴子

こゝろなきうなゐらまても指さして
　まつの木の間のつきをめてけり　石川類子

秋なからうれしきものは夜な〳〵に
　まつのはこしに見つるつきかけ　石川楽子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

松の葉にたまぬくつゆのかずさへも
見ゆるはかりのあきの夜のつき　石川久子

須磨のあまの塩やくけぶりむらきえて
まつよりもろゝあきの夜のつき　谷野峰子

めづらしく秋雨やみてさきはきの
まつのこのまにかゝるつきかけ　清島治子

まつまもる月のひかりにつゆ見えて
こゝろちきよくすみわたりけり　田中ひろ子

山の端をいでゝまつはのかずをよむ
つきこそあきのすがたなるらめ　松田ゆき子

ひさかたのおほうちやまのやま松の
葉こしのつきのひかりさやけし　松田みどり子

さしのほる月のみかげもすみの江の
まつの葉こしそゆかしかりけり　岩本さく子

いくちよも變らぬいろのまつが枝に
かゝれるつきのかけのさやけさ　小野じゆん子

床しさにふくろもしらでたちつくす
つきすみよしのまつのしたみち　岸せい子

くさむらにすだける蟲の音はきえて
まつのこのまにつきはやさりぬ　林常子

山の葉をいまはなれたるゆふつきの
またまつかけになりにけるかな　大竹治子

松が枝をちさせのさもさめてぬらむ
さやけくやさるあきの夜のつき　林艶子

もろさもにのきのはしゐに月までは
まつやさりけりまつのこすゑに　白井さま子

秋かぜにこさのねかよふまつかねな
もりくるつきのかけのさやけさ　松尾菫子

さやけしさ神らめつらんあきの夜の
つきすみよしのまつにかゝれり　壺井みき子

いざかこよはやこぎいたせ月かけは
いそやままつにほのめきにけり　高田きよ子

端居してこよひもまつの木の間より
わつかに出つるつきを見るかな　高橋てる子

山さともみやこもおなしながめかな
まつにかゝれるつきのひかりは　小森さた子

立ちならふ千年のまつのこの間より
もれてくまなきあきのよのつき　北村左枝子

立ちつゝくさきはの松のこのまより
かけさかにもるゝつきかな　北村てい子

小夜ふけてねられぬまゝにながむれは
まつの葉こしにつきそすみける　本間信子

おなしくはかくながら見ん一本の
まつにかゝれるあきのよのつき　林久子

盤なるまつの木の間にやさりつゝ
さやかにてらすあきの夜のつき　失名

なかそらのくもなき影を見るよりも
まつのはこしのつきそあかれぬ　樋口のぶ子

てる月のひかりをよそにしながらも
　あはれをそふるまつのひともと　佐藤誠子

立ちならぶ松のひまもろつきかけは
　さやけくもまたさびしかりけり　大谷謹孝子

松か枝におくしらつゆにてりそひて
　光りさやけきあきの夜のつき　石川助子

しほかせさゝもに磯馴の松か枝に
　ひかりもみちて昇るつきかな　九里みち子

九月廿日兼題　辭書の撰擇を乞ふ

天　筑後國浮羽郡浮羽村　山手てい子

まなびの庭にありつるころは、よろづ師の君のねもごろなる御教へかうむるまゝに、辭書などたよるべき要も覺えず打ちすぎはべりしに、御許を退きはべりしより、古への文見るにも、あるは巳が思ふことかきいでんにも、たど／＼しきふしのみ多きに、片山里のすまひとて、こと／＼問ひ參らせん師もはべらねは、彼の辭書てふものゝたゞすより他にせんすべもなうこそ、さるに、世に類多き辭書の中、妾等のたよりとするに、もとも便りよきは、いづれにか、わきかねはべれど、なめげながら文して御指圖乞ひまつるになんかしこ。

地　甲府市山田町　名取正代子

近き頃、文の道も、すゝみにすゝみて、我國の辭書の世にいでつるもの、いとさはに侍り。妾、此程、いさゝか取りしらべまほしき事の侍りて、これかれの辭書見合せ侍りつるに、其事柄の、いさゝかことなるところありけれど、いづれをとらましなど、打まよひつゝ、是かれのよしあしも、わきまへがたく、いとこうじ侍り。されど、いかで、よきもの壹部をもとめんとて、きのふ文店より取寄せ侍りつるは物集先生の言葉の林、高橋大人のいろは辭典、近藤大人の言葉のその、大槻の大人の言海などに侍り、これもかれも、皆世に名高き大人たちのものし給へるものなれど、いづれとりまさりは侍らざらめど、妾が如き初學びのものにはまづいづれを見侍らんには、ふさはしかるべきか、將此外にもよき辭書の侍らむ、ゑらみ給て、よきにみをしへ給はらんことをせちにねぎつるになん。

人　福岡縣筑前國警固村藥院　東野とく子

川水の渡れてはやき月日をぞ、學びの業もてしから

みとなしいそしみあへる御代と成りゆくに立たがひて、世の交際も立げく、女とても、みやびたる水ぐきのあとをたよりに、遠く別れし人にも、互に交りをあたゝめて、たきちなみを忘れず成り行くを、玄ろし召すやうに、わのれは幼き時より、兎角病がちなるに、ましてかゝる片山さとに生ひ立ち侍れど思ふがまゝにもねまなびさりしか、いかにも口惜しう又うらはつか立うこそ、されどとて、みやび文物さんには、其意をえぬことども多く、身に取りての自由いはんかたなく侍れど、只いとまの折り〳〵ならひ侍れど、添削を乞ひねがふべき方とても侍らねど、獨習のたつきにもと、辭書一部求め置きなど、たよりよからんと存じ、書林にも問ひ合せ侍れど、辭書にも、いろ〳〵かず多く、何れともね定め侍らねど、御許樣のこれころと見給ふらんを、御撰び御をしへ給らんことを、ねき奉るになんあなかしこ。

(以下原稿到着順)

佐々有鄰子

辭書は文明の御代には千くさ八千くさにあるべければ、天さかるひな住の姿等が、朝夕ひもさきてくりかへす辭書は、いかなる人が撰びしものをひらきみて、與國の辭のはたらき、變格正格をしるべき山口の栞になしなばよかりなんか、今もてはやす新體歌さかいへるものには、何さいふ書により、詞のあやを織いだすべきか。且は支那語西洋語をほんやくするには、いかなる手ふりの辭書によるべきか中かきのへだてなき令嬢たち、片山かげ人ばけばけしき賤女さみすてたまはで、川柳れもごろに數へ示したまひてよ。あなかしこ。

田部ささ子

學びの窓にありつるころは、師の君いまして、なにかれうかゞひまつり、讀みもし書きもせしものを、いまの身の、わけて山居の友だにあらぬを、さはいへかうやうのみにてあるべきにあらねば、折に觸れたる心やりに、文を物しなどしはべれど、更にたどきなければ辭書もがなと切に思ひなりぬ。されどかずおほき中に、之れをしまがんさ定めかねはべれは、朝夕に見覺ね遊ばすらんさ思はるれば、姿ごさきまだ色淺き初學ひのよろべきなるべきを、示し給ひてよ。あなかしこ。

輕部壽子

余ははろなかろ山里に家居をうつし侍りしより、いさど淋しく、いさまあろにまかせ、文章軌範及論語など取り出して調べしも、數日間病氣のためにか、心よく打わすれ、只今にては辭書入用に付、さひはひ御許さま、近きに御上京遊ばさる折、あなたさまの、宜しきさ思ぼしめしの辭書御買ひもさめ被下度先は御願迄あら〳〵。

長山績子

目にはさやかに見ねれども、風の音にしられぬる今日このごろ、の君にはいつも御けしきうるはしうさかねまーますらむさ孵き奉ろ

にこそ、さてもこたび遠き國の友のもとより、熟字の辭書をたのまれ侍れど妾ごときは、才なく、はたこゝろたしかならぬものにしあれば、まことのよしあしを得わかたで、たゞ大方のよしといふ方にのみもなづみて、輕からぬ友の賴を仇にせむは、いと口惜き事になむ。さるを日頃より御事繁くおはしますに、いと御さまたげなる業にし侍れど、御こゝろによしとおもひ給へるを撰びいだし給ひてんや。都にても名高き、師の君の御撰定とあらば、これをきく友のよろこびも如何計かとおしはかられ、此上よりこゝろゆく業なるべく、たのまれし妾もいと甲斐ある心地し侍れば、何とぞゝこの御ねがひ許し給はりたく、せちにねがひまつるにこそ。あなかしこ。

西川順子

學ぶに師なる片山里は、たゞ辭書をたよりとするのみにて、他にせむすべも侍らぬを、何事にも暗き身には、いかなる書のよろしきにか、思ひわかち得で、困じはて侍りぬ。貴姉には、たよりよき都に住まはせ給ひ、しかも何事もよく明らめ給へば、必ずおもひあたりたまふ書の侍らむを、いと〳〵なめなるわざに侍れど、御序のふしに示したまはりまほしうほなむ。かしこ。

右田藤子

妾事、こたび高等小學校を卒業致し、女學校に入學致す筈につきいろ〳〵の、辭書求め度候、先日讀本の方は買ひ取り候へども、辭書は如何なるものを買ひてよきか、少しもわからず候、師の君には、かれ〳〵何事をも御尋づれ申上候事ゆゑ、このたびも何卒辞書を御しめし下され度、返す〳〵御願ひ申上候かしこ。

西　艶子

よもの山邊も、はやもみぢ初めて鳴きわぶる蟲の音に草むらの露けさ思ひやらるゝに、夜半の野嵐、音すさましく、早く秋も最中となりぬ。折柄君には、いかゞ渡らせおはしますらん。日頃のなほざり、詫びまつる言の葉もあらすなん。いづかたも同じ事ながら、わけて山里の秋のもの淋しさ。夜々の蟲の聲も聞きあきていとつれ〳〵に、ひたすら明けがたきをかこち居り侍りぬ。其につけても、かの、雪に照し螢を集めし、古人の苦みを思ひ出つればかゝる長き夜すがら、徒らに、ねてあかさんは空恐しく、せめて一巻の書なりとも、讀み習はま欲しう思ふ侍れど、さりとて、晝の御勞れもおはしますを夜までも、父君をわづらはしまつらんは心苦し。はた思ひ止るべくもあらずたどりたどりてなりと獨にて讀むよしもがなと、思ひ立ち侍りぬるにてもそがたよりとあふぐ書なくては、せむかたなければさる書求めたく侍れど元よりかゝる事には一しほくらき此身いかなるが妾如き初學ひの者にも見易く、かのふべきか、更にわかり侍らず君は兼てかゝる事には、いと深うおはします由承り侍ればいかで妾が爲に、そが一巻を撰びたまひてよ。さすれば、新に師の君を得つる心地にて自ら怠りの心にむち打ちてつとめはげみ侍らんかゝる事まゐものぼらで願ひ奉るはいと〳〵心ならねど、今日しも去りがき事の侍りて、得まみね奉らず、いと拙き文して、かくねがひ奉るにこそ。あなかしこ。

江口とみの子

さしつけがましう侍れど、私事、此頃心にはづる事ありて、いさゝか和文を心得まほしう思ひ侍れど、かた山里にて、よき師とてもなく、いと〳〵困じ侍れば。辭書によりて、獨學致さんと思ひ侍るを

此ころは何やかやと、いろ〳〵いでき侍るが中に學びなき身の、見るによろしきふみも侍らば、御さし示し給はらんことを、ねぎ奉らんとて拙き筆をもはらあへすなんと。

篠原菫子

文のたつきにもならむと、かねてより國ぶりの辭書、購ひたしと、思ひ侍りけるも、淺學の身とて、いつれよろしからむと定めかねて、今までうちのび侍りしが、此頃は、辭書なくては、いよ〳〵たよりわろくおぼえ侍れは、御いそがしき御折柄をもかへりみす、いとなめけなる業ながら、何人の著述がよろしかるべきか、ひたぶるに、大人の御撰擇をねき來るになん、あなかしこ。

東野けい子

この頃、父養生の爲め、閑清の地をならひ、此山里に家居を移し侍りてより、萬に便りあしくて、師と頼み來らせん方も侍らす、只た折にふれて、物の哀れさをかしさなと、自然の景色をめでつゝ、かた讀みもの出きなとしてなくさみ侍れと、學ひなき身の、解し難き文字とも多く侍れは、辭書一部、獨習の友にと、求め得たく侍れと、この頃は、いろ〳〵の文はてき侍りて、何れとも定め難く候へは身にとりてよろしからむをならはせ給ひて、御さし示し、與れ〳〵れき奉るになん。あなかしこ。

矢女くり子

妾こと、辭書の善きもの一部あかなはんとて、去る方より、書籍目錄を借り受け、彼や是やと廣告をもとめけるが、夥多あるもの、皆それ〳〵に賞めたてあらねはなきに、何れそよからんと、迷ひそめてなん、さりながら、其うち某先生の著したまへるそれ書は、價もここに貴きゆゑ、これこそと目とせるに、思ひきや、此書は活字の植ゑそこれ多しとのうはさありとは。されはにや、今は何なめとに撰はんすへもなく、ほとほとこうしはてけるが、友の某申されけるは、その道にあかるき人に、撰ひもらはんこそよからめとのことに、けにさることよと思ひしまゝ、豫てより御尊名をうけたまはりおれるをたよりに、恐ろ〳〵も、此こと願ひたてまつるになん。若しいたづかはしくはおほさんなれと、御示し給はは、如何にうれしかるへき。あなかしこ。

弘田ゆき子

此頃は如何に渡らせ給ふにか、いつまで草のいつもいつも、梓の弓のたゆみなく、學びの道の奥深く、わけ入らせ給ふらむとこそ推し侍れ。扨は、こたび、やからなる何がしより、みわけ惑ふ道の栞にもなど、ねもごろに云ひおこせて、倭漢土、或は西の國ぶりの辭書、くさぐさ送りこし侍りつれど、數ならぬ身は、難波の事もわいだめかね侍れば、ひと度はさてうち置侍りしも、あたら人の眞心を、あだに見過してんも心なしと思ひなりて、日頃何事もみしるべを仰ぎ侍るからす、いかで初學びのたどりやすからむものを、撰り出ださせ給ひてよと、願ぎまつるになむ。あなかしこ。

谷野峰子

過る日、友よりの消息にて、師の君つつがなくおはしますよし承はり、うれしく侍るものから、なかなか、巳がをこたりのむくろしさ、いかで過ぎゆく月日と共に、ゆるしやり給ひてよかし。偖てつれづれ、おのが方みじかきをなげき、いとまなき身ながらこち居り候に、此頃、家用のひまを得たれば物學びせばやと思ひたちはべれど、わき

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

まへがたきをとかん辞書のなきになやみ候、あはれ師の君、ゑらびてたび玉ひれ、自まうでて、ねがひたく侍れど、守る人なきにこうじて、此者伺はせ侍るになん。此萩少し斗りには侍れど、むくらの宿にきぎすの床とならんより、御机のほとりにをかせ給はらんには、花の心も如何斗りうれしからましと、二枝三枝手折參らするにこそ。あなかしこ。

林　常　子

このころ、むつびし友より、女鑑を送られたれば、かゝる片山里にある身の、つれ〲なるまゝ、いとよろこばしくて、うちひらきよむに、そが教の庭には、もろ〲のひめたちの物せられたまひし、文、あまた侍りしが、おのれ、學の道あさくて、あはれにおかしきふしをも、さだかにときがたく侍れば、よき辭書もがなと思ひぬれど、もろ〲のうしたちの、物せられ給ひしがあなれば、いづれとも定めがたく、いとこうじ侍り。あはれ、わきやすうとかれたる、ふさはしきがあらば、御心にかけさせ給ひて、よき書ゑり給ひてよ。あなかしこ。

矢　次　靜　枝　子

玉のいほ近くいへゐせし折は、なにかにつけ、こまごまとことわけて教へとしたまひしかば、こよなきことにはへりしも、かく遠きに引き移りては、育なひ來らんも中中のことにあり、且つ此あたりは、おしなへて、朝に草きり夕に木そゝくを業とせる、賤が家のみにて、誰とふへき人もなければ、心のくもりをはらさんすへもなく、ほとほとこうじはて侍り、されはせめては辭書のよきらのを一部購ひて、師とし友とせんと思ひはへるなり、さるに、いかなるものゝよからんか、はかりかたければ、吾師のさしつを乞ひ來らんとこそ思ふなれ、御煩しくはおはすらめど撰ひたまはゝ、殊にうれしくなん。

白　井　と　を　子

明かなる師につかでは、道のくらきが如く、獨學びするものゝ、よき辭書なくては、疑ひ晴れやらで、いたつらに心を苦しむるぞ本意なきわざなる。己れさいつ頃、神田わたりを通りかゝりしに、紙數もいと多くて、表紙にはいみしき文字さへある古辭書の見當り侍りしに、もたらぬ折とて、うれしみて、かひもて來て、疑はしき文の節ともたづぬるに、なき文字多きのみかは、時々あやまりたるふしさへ見ゆるに、ゆゝしう覺ゑて、さしおくことさへ侍り。そも己が見聞の狹き故とかなしうなん。かゝれば、いとはゞかり多き事には侍れど、あはれとおぼし給ひて、御暇の折もあらせ給はゞ、よきものゑらびて得させ給へや。かしこ。

降　田　槙　子

萩の上風、何時しか、身にしむ頃となり侍るを、大人には、いとゝかの、御障りもましまさで、時々文の林に、分け入らせ給ふと承るなん、いとも嬉しき。さてもまた、我まゝの那山出で、大人を、わづらはせまゐらするは、いとかしこけれど、例の玉らぬ、身とゆるい給ひてよ。おのれ、こたび、辭書一卷を、求めまほしく、そこここゝの賈ひろめのふみなど、見侍れど、數多ければ、何れをよしとも、あしとも定めかね、まどひ居侍るを、かねて聞く渡らせたまふ大人に、その選びをねぎまつるになん。あはれ、いとはせ給はで、よきを教へたまはば、こよなううれしうこそ。あなかしこ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

樂あり、貴賤の參詣ひきつらねていとにぎはし。

十七日　荒町といふ所にて御祭會ををかひ、あまたのねりもの風流をつくせるさま京師の祇園會にもをさ〳〵おとらず、供奉の諸士甲冑を着し、騎馬の行裝おごそかにして、よき見ものなり、神輿は三はしら、第一は東照權現第二は日光權現第三は山王權現なりとぞ、

　東より照すひかりもうらゝにてけふ神まつる水戸のさと人

廿五日　下河邊行願のもとへまねがれ侍りて、發句をのぞまれ侍りしかど、いなびがたくて、

　卯の花を月夜とやなく郭公

五月二日　この比、西山殿（權中納言光圀卿）御山莊より水戸へ出させたまふが、御對面あるべきよしれはせ下されて、けふしも拜謁す、世の人泰山北斗の如くあふぎ奉る御名を、よそながら聞及びまゐらせしにあやまたず、御容貌のどやかにして、溫良恭謙の德をそなへ給ふとぞれはゆる、ちかき比に西山へまゐるべきよし約せさせ給ふ。

十三日　松平大炊頭賴雄朝臣かくれさせ給ふ、是は、西山殿の御弟君なれど、府中うちひそみぬ、ふる里の千年山にとゞまれる優婆夷のもとより文れこせたるはしがきに、

たび衣れもひたちにしあづまぢのこのもとさぞなすみよからまし
あさなゆふな佛のまへのをこなひもひとりさびしき山の下いほ
など見え侍りし返しに、
ともに見ぬうらみぞふかき東路のこのもとごとの花のさかりを
うらやましひとりれこなふ山かげのあかゐの水はすみまさるべし

扶桑拾葉集は、西山殿御編輯まし〳〵て、後西院のみかど題號をたまはり、幸仁親王序を書かせ給ひたるよし、かねてうけたまはり及びつゝ、いかにもして一覽のねがひふかゝりしに、ざいはひ子どもにたまはせし御本を、禪座のいとまにあく事なううかゝひ見侍る、よろこびのあまりに、
君がかく拾ひあつめししきしまのやまと言葉は世々にくちせじ

廿三日　先考法雲院宗慶居士の正忌日なれど、岱崇山天德寺へ參詣す、此の寺は、大明の心越禪師すまれたる地なり、明眼の老師と聞れよび侍れど、はや〳〵より相見の願ひふかゝりしに、法縁やなかりけん、三とせさきに遷化せられたり、法嗣呉雲和尚にあひて、禪談こゝろすみて覺ね侍べりし。

廿九日　自息軒常覺阿闍梨のもとにて、

橋にやどれことよひははとゝぎす

六月十日　西山殿の侍醫井上玄桐より、爲誠がもとへ文來る、ひとひふつかが程に、予をいざなひ來るべきよしなり。

十二日　朝まだきに、梅戸をいでゝ西山にれもむく、味禪、爲誠、爲明、定輔など同伴す、那珂川のわたしを越ゑて、青柳、後臺、中臺、菅谷、額田の里々を過ぎて、久慈川をわたる、此の川は、萬葉集に、まかちしゝぬきとよみたれど、

ゆくさきをいそぐ旅路ぞ舟子ども眞梶しゝぬきはやわたさなん

といへど、舟子そりてわらふ、禪翁と物語しつゝいつしか太田の鄕にいたる、當所は、むかし、佐竹氏の城地なれど、今に古壘空壕ありて、懷古の思ひなきにしもあらず、それより西のかた、なゝめなるこみち十七八町すぎて、午の刻ばかりに、西山のふもと白坂といふ在家につきて、湯あみあせをさめて御山居へまゐる、そのみち、兩方は山にて、谷あひの田の畔をかなたこなためぐる、山松のあひだに、梅、櫻、桃などあまた植ゑられたれど、花の比れもひやられたり、田の面に鶴一雙をはなちかはせ給へど、林和靖が隱栖もかうやのさまにやと、いとからめきたり、白坂より六七町もあゆみたらんと覺ゆる程に、柴橋をわたし、谷水をたゝへて、紅白の蓮やうやう咲きいづる比なり、惠遠法師廬山

のありさまもかくぞと、心のうちいとすが〳〵し、橋をわたりて竹扉を入りぬれど、佐々宗淳、井上玄桐など出むかへ、おないして御前へまゐる、披髮長鬚野服瀟洒として誠に塵外の御すがたながらも、御生質のうるはしさにや、いまだ七そぢの御容貌とは見えさせたまはず、なほ耳順の御ころほひなり、御すまひのさま、松のはしら、茅の軒ど、竹のれはしますべてさう〳〵しく、墻壁には、蔦、むくらなどはひのぼりつゝ、かの末摘花の古宮のこゝちし侍り、さしも金城湯池の貴富をすてゝ、かゝるやつ〳〵しき御すみかも、もとより御本意の事とは申ながら、よそよりの見るめは、御いたましき方にぞればね侍る、東語西話やゝ時うつりて晩餐を給はる、調味いとこまやかにして、枯腸をうるほし侍りぬ、濃茶を御手づから給はれるなん、身にも袖にも餘りてぞ覺ねし、食後の緩歩は養生なりとのたまはせて、御庭中を徘徊す、れまへの山より一脈の瀧流れち、下にたゝへて泉水となり、さらになかれて冷々たり、盆池にうゑられたる唐蓮は、なかばひらけて馥郁たり、どこなつ、ひめゆり、夏菊など、ませをわかちて見處れはし、そのほか四時の草花數志らす、むへも御閑居のよき友がきなり、谷のくまに文庫をかまへて、和漢の書籍むなぎにみちぬ、朝な夕な卷をすてずして日を消したまふとぞ、やがて本席に歸りて、題をさくり、御當座わりれの〳〵沈唫のわひだに秉燭におよび、風すゞし

華族女學校學監下田歌子先生編述

家庭文庫

全部六册和裝
隔月壹回發行
正價●壹册金三拾五錢●參册前金壹圓●六册前金壹圓九拾錢●郵税壹册六錢づゝ●御注文は必前金の事●郵券代用一割增

總目次

◯第壹編　女子書翰文
◯第貳編　普通禮式
◯第參編　詠歌之栞
◯第四編　料理手引草
◯第五編　家事必携
◯第六編　婦女家庭訓

華族女學校長細川潤次郎先生序文
家庭文庫第壹編
下田歌子先生編述

女子書翰文

全壹册和裝
大和綴頗堅牢美本
正價卅五錢
郵税六錢

編者の要旨に曰く「此篇は、たゞに、女子が通俗書翰文を認めんさするに當りて、適切なる作例、豐富なる材料さを得るに、便且つ利なるのみならず、吉凶事、其他一切の事に就きて、一々其定則、慣例より、字句の使用法、書式の如何に至るまで、剴切なる注意を與へたる上に、更に今古消息文の變遷、得失をさへ明示して、文書く人の助けさせんさすなり」さあり、以て其抱負の大なるを知り、以て其知見の新なるを識り給はゞ、本書の價値如何は覺り得らるべし、伏して愛讀を請ふ。

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女學雜誌

第四百四十九號

明治三十年九月廿五日發兌

◎口繪盲啞教育の不思議なるよりも更に不思議にして驚嘆すべき白知教育の開祖エドワードセグィン博士の肖像◎社說二種の世界合同運動は赤十字同盟と婦人矯風會を詳論す（K.S.生）◎家庭某學校女生徒の家庭日記○家の厄介（かも子）○心づきたるまゝ（紙類○品物に名を記し置く事）れむら○武士の家庭○各地方の子守歌◎講義夫婦アルカリの慈養作用陸軍樂劑監石塚左玄氏の新論、食養法に一大改革を起さんとするもの其他種々

毎月二回十日廿五日發行一部定價十錢半年前金一圓十錢一年前金二圓見本郵券十錢（内國無郵税）

發行所 東京麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

◎一手大賣捌 東京神田表神保町 東京堂

婦學 裏錦

一冊定價六錢◎外に郵税一錢を要す◎每月十五日發刊◎每號六十頁以上

◎第五拾九號（要目）明治三十年九月十五日發行
結婚と戀愛と　月明樓主人　警醒逸話（四）　松
本高太郎譯　俗諺女訓（十二）　桂の試やし　涙餘
一筆紅波　美人の境遇　黄耀　熱と未熟と
登勢子　スラートの珂琲店　常北生譯　わか
れもかげ　桔梗女史　白頭巾（小説）　まがき
貸二階　夢氷散士　源太之產衣　女童なにか
し

發行所 東京神田駿河臺北甲賀町十三番地 尙絅社

合資會社

新撰百種 第三編

福良虎雄君著（十月上旬發行）

女子の職業

全一冊 菊判美本

定價三拾錢 郵税本舍支辨

本書は女子を有せらるゝ父兄及斯道に志ある婦女子諸彥の什寶にして女子職業の指南車なり請ふ發行を俟て陸續購讀あれ殊に本書は文章平易にして何人も一讀の下に理會せらるゝや必せり

發行所 東京日本橋區吳服町一番地（電話本局五〇六番）普及舍

三輪田眞佐子著

女子の本分 第七版

定價金廿五錢
郵税金六錢

東洋の君子國秀麗端正なる女教自然に存す之を涵養し之を發揮し以て貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめんこと是れ『女子の本分』の主張する所なり今や江湖の望に應じて第七版の成るを告ぐ苟くも女子教育に志あるもの座右一日も缺くべからざる良書たるは世の許す所なり

發行所 東京京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事○別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十年九月十八日印刷
同年九月二十日發行

編輯兼發行人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛

印刷人 東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木艮雄

發行所（電話番號本局八八） 東京京橋區築地二丁目二十一番地 國光社

（明治二十四年八月四日內務省認可）
（明治二十五年三月十二日遞信省許可）

貴婦人用帶締

●野口小蘋女史考案並畫







◎金、白金、赤銅、朧銀等の金屬を用ひて彫刻を施せしもの

甲價六拾圓
乙價五拾圓
丙價四拾五圓
丁價四拾圓
戊價參拾七圓
己價參拾三圓
庚價參拾壹圓
辛價貳拾九圓
壬價貳拾七圓
癸價貳拾五圓

◎金又はプラチナ地にダイヤモンド、エメラルド、ルユビー、サファヤ、眞珠等の寶石寶を装嵌したるもの

甲價百二十圓
乙價百圓
丙價八十五圓
丁價七十圓
戊價六十五圓
己價五十圓
庚價四十圓
辛價三十圓
壬價二十圓
癸價十五圓

右の金ものは何れも名工の手に成り紐は織物或は種々の新形又は古代の組方に倣ひたる絹打にて其製作都て壯麗にして優美なり尤も彫刻の疎密わるひは寶石の大小に依りて代價にも高下あれは冀くは車を枉げて弊堂に臨み其現品を御覽じ玉ひ但し遠隔の地なれば郵便にて御注文を下し玉へ代金御送附次第その價に相當の品を精撰して調進し參らせ聊にても御用に背く事は候はず若し思召に適はざる時は交換し玉ふとも原價を取戻させ玉ふとも御望の隨意に候ふべし其手續とも屢々新聞紙に廣告したる弊堂店則に詳なり

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地
時計及寶玉類貴金屬美術品商（電話番號本局三百三十三）
天賞堂

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）
天賞堂小川町出張所

大阪市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七三三）
天賞堂大阪出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂名古屋出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂廣島出張所

熊本市唐人町通上鍛冶屋町十番地
天賞堂熊本出張所

長崎市萬歲町上野屋方
天賞堂長崎臨時出張所

北海道小樽色內町越中屋方
天賞堂小樽臨時出張所

妙技一等賞牌



（印刷所　東京國光社印刷所）

Digitized by Google